噺話

912.3
カ

下懸囃謡大成目録

式三番 初　高砂 脇能
難波 楽 三　弓八幡 脇能 七
老松 真ノ序 十　呉服 脇能 十三
東北 序ノ舞 十五　芭蕉 序ノ舞 十七
江口 序ノ舞 十九　千寿 中ノ舞 二十
采女 序ノ舞 廿二　楊貴妃 序ノ舞 廿三
二人静 序ノ舞 廿五　班女 中ノ舞 廿六
祇奔慶 序ノ舞 廿八　紅葉 [illegible]ノ舞 廿九
野宮 序ノ舞上ノ序破ノ舞 卅一　定家 [illegible]舞 作

井筒● 序ノ舞 廿七
杜若● 太コ序ノ舞 四十三
小塩● 太コ序ノ舞 四十七
羽衣● 太コ序ノ舞破ノ舞 五十
西行桜 太コ序ノ舞 五十二
遊屋● 中ノ舞 五十六
芦刈 男舞 六十
安宅● 男舞 六十四
小督● 男舞 六十八
浮舟 一声カヽリ 七十二
源氏供養 七十六
箱崎● 八十
三井寺● 八十五
富士太鼓● 楽 九十
唐船 太コ楽 九十四
三輪● 神楽 九十八
自然居士● カツコ 百一
東岸居士 カツコ 百五
山姥● カケリ 百九
●養老 神舞 百十四
●融 早舞 百十六

佛原 序ノ舞上ノ一声 四十
夕顔 舞上一声 四十八
雲林院 太コ序ノ 四十九
遊行柳● 太コ序ノ舞 五十一
楊貴妃 太コ序ノ舞 五十四
松風● 中ノ舞破ノ舞 五十八
盛久● 男舞 六十二
鉢木 男舞 六十六
摂待● 男舞 七十
玉葛● 一声カヽリ 七十三
桜川 七十八
百万 イロエ 楽 八十三
天鼓 楽 八十七
梅枝 楽 九十二
邯鄲● 太コ楽 九十五
龍田● 神楽 百
花月 カツコ 百三
放下僧● カツコ 百七
當麻 早舞 百十
海士 [illegible]舞 百十
猩ゝ [illegible] 百

玄象（早舞）百十九 寒衣（神楽序）百廿一

志賀（神舞）百卅四 関寺小町 百卅六

生田（序舞）百廿九 雨月（太鼓序）百卅九

舟弁（カケリ）百卅三 六浦（太コ序舞）百卅七

春日龍神（ハタラキ）百卅七 檜垣（序ノ舞）百四十

木賊（序舞）百卅一 吉野静（神舞）百四十二

烏頭（カケリ）百卅四 女郎花（カケリ）百卅五

白楽天（高序）百四十六 熊坂 百卅八

海尊考渡（早笛働）百卅九 加茂（早笛働）百五十

金札 百五十一 岩船 百五十二

以上八拾番

式三番

とう〱たらりたらりら

たらりあがりららりとう

ちりやたらりたらりら

たらりあがりららりとう

所千代までおはしませ

我等も千秋さむらはう

鶴と亀とのよはひにて

さいはひ心にまかせたり

とう〱たらりたらりら

ちりやたらりたらりら　たらりあがりららりとう

なるは滝の水　なるは滝の水日は

照るとも　たえずとうたり　ありうとう〱

絶えずとうたり　常にとうたり　君の千

[illegible]

なるハ滝の水日ハ照るとも　たえずとうたり
ありうとうとうとう　〽あげまき（総角）やとんどや
〽そよや　〽ひろばかりや（比盧婆賀利耶頓之耶）とんどや
いたれども　〽まいらうれんげ（参蓮華利耶頓之耶）りやとんどや
ちはやふる（千盤破）神（神）のひこさ（彦佐）の昔より　久しかれとぞ
祝ひ　〽そよやりちや（鷲破哩耶頓之耶）とんどや
〽およそ（凡）千年（千年）の鶴（鶴）は万歳楽（万歳楽）と謡（謡）うたり
〽又（又）万代（万代）の池の亀（亀）ハ甲（甲）に
三極を（三）備（備）へたり
〽なぎさのいさごさくさくとして
あしたの日のいろ（玉）を朗じ
滝の水れいれいとして夜の月あざやか（鮮）にうかん（浮）だり
目出度天下泰平（泰平）国

ゆるぎなき御代とぞめでたき

岩船

上〽抑是ハ天のさくめハ岩船をおし秋
代の義へと　我ハ又下界にとゞまり
龍ハ宮を守り秋津洲の猶守り
我ハ神代のふるきいにしへ　又治まれる
代に於て　宝の船を擁護しまうり
舳もともやく　岩船宝をよする
波の数拍子を揃へ　えいやえいさえ
いさ　ひけや岩舟　あまのさくめの
波の鼓　ていとう拍子打つ
さし浪えいさを廻して住吉の松の風
かゝるよきのさかへ寄せてのふき

やかろれく潮をみちくる浪まふ
て八大龍王八海より飛行し御前の
はやそれよりかくまゐりて
かまと渡ふ孟てかか居も国やおは
吉の茶お露の御松を兵治お松も
数万民拝揃をこひおもやめのごとく
金浪珠玉八子のこちて山のよくに
はる浦の兎を奇りの拝をく御世
まそさふる御代とを成ふまで

以上八幡番

此後ハ外雑派出来

かんおんの今日のはきたうありがたや
やおかたの翁とも　おしかたよの翁
ともそやいづての翁かようく　水そよや
千秋万歳の悦ひの舞なれば一まひまはふ
万歳楽　万さいらく　万さいらく
長久圓満そくさい延命今日の御祈祷也

○笛之唱歌部

○壱ノ序

○ヒイ○ヒウリウヒイ○ホヲラヲラアロヲ○ヒウルウ
リイヒヨラア○ヒヤアイホヲラアラアロヲ○ヒヤヒヤリ
ヒヨラ○ヒヤイホヲラアラアロヲ○ヒウルウイヒヤリウ
ヒイ○ヒヤイヒヤウラアウラア○ヒヤヒヤヲ○ヒヤ
ヒヤタウタウロヲ○タウタウリヤアヒヤミラ○タウタウ
ルウイヒウコヲ　ヒウルウイニヤリウヒイ

○神楽序

○ヒヤルリヤロルリ○ヲヒヤラリイヤライヤラアーラ○
リウヒヤルラヒウイヤ○リツリツリウロロヒヤラ○ラアラ
アヒヤイツヒヤルラアラルウリヒヤラアラ○ラアーラ
アラツヒヤルラ○ヒヤリイリ○ヲヒヤラリヒヤラ○リ
ヒヤラ（二二）ララララ○ヒヨラ○ヲヒヤイトラ○ヲヒヤイト
ニヤルヒヤルラアラルウリヒヤツヒヤルラ○ヒヤラツララ
○ラアラアラアライツヒヤルラ（初度）○ヒヤリウヒイヒウヤア
○ヲヒヤラリヒヤアララ○リイヒヤラアラアラアラ○
ヒヨラ○ヲヒヤイトラ○ヲヒヤイトヒヤルリヒヤルラ
ラヒユイヒヤイツララアラアライツヒヤルラ○
ヒヤニヤアラウヒヤライツイツヒヤルラアラヒユイヒヤイ
ツララ○ララララアツヒヤルラア○ヒヤウリイヒウ
ヤア○ヲヒヤラリヒヤアララ○リイヒヤデアラアラア
ラア○ヒヨラ○ヲヒヤイトラ○ヲヒヤトニヤルリヒヤル
ラアラルリヒヤイツララア○ラアラアフイツヒヤルラア
（二帖目）○ヒヤリウヒイヒウヤア○ヲヒヤラリイヒヤアララ○
リイヒヤラアラアラアララ○ヒヨラリイツリ○リイツララア
ラアルラララヒヤイツヒヤイツララアラアヤヲヒヤライツララア
ヲララ○ラアラアフイツヒヤルラ○ヒヤウリヒウヤア○ヲ
ヒヤラリイヒヤララ○リイヒヤラアラアラアララ○ヒヨ
ラ○ヲヒヤイトラ○ヲヒヤイトヒヤルリヒヤルラ○ヒイ
ヤロルウリヒヤイツヒヤラツイツヒヤルラララルウリヒヤイ
ツラアラアア○ラアラアフイツヒヤルラア（三帖目）○ヒヤウリヒ
ウヤア○ヲヒヤラリヒヤララ○リイヒヤアラアララア
ヨラ○ヒヨラ○ヲヒヤイトラ○ヲヒヤイトヒヤイトヒヤル
ヲアヒ○ヒヨラツリヒヤルラアラルリロヤイツララアラ

○ラアラアラツヒヤルラ○ヒヤウリイ（ハレヨリマヒニヤウカラ ロシアチアノ）

○楽序

○ホヲヒイ○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤヒヤ○ヲヒヤゴイヤ○ヒ
ヤヲ○ヒヤウロルラ○ヒユヤルララ○ヒヤウラトロ○ヒヤ
ラトルヒヤロルラ（是まて）○ホフヒイヲヒヤロルラ○ヒヤルウ
イヒヤロルラ○ヲヒヤトルラヲヒヤロルラ○ヲヒヤラトロヲ
イ○ヒユヤルラ○ヲヒヤラアイヒイウイヤ○ヒウロロヒヤ
○ヒウラ○ヒウロラ○ヒウリウトロ○ヲヒヤロルラヒホ
ヒイヲヒヤロルラ（初度）○ヒヤルウイヒヤロルラ○ヲヒヤド
ルラア○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤラトロヲイ○ヒユヤルラ○ラ
ヒヤラアイヒウイヤ○ヒウアロヒヤ○ヒウルイヤ○ヒヤ
ヒヤ○ヒヤラリイヒヤイヒヤイヒヤウロイヨロイ○ホ
ヌヒヤアルラフロ○ヒヤラリイ○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤド
ルラア○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤラトロヲイ○ヒユヤルラ○ヲ
ヒヤライヒイウイヤ○タウタウヒユウイ○ホヲラルラア
ラアロ○ヒヤライイ○ヲヒヤロルラ（二度）○ヒヤウイヒヤ
ロルヌ○ヲヒヤトルラ○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤトロヲイヒユヤ
ルラ○ヲヒヤラアイヒウイヤ○ヒヨリイフロヒヤアヒウルイヒ
ヤルイヒヤラロ○ヒユイタウヒユイタウ○ロラリウロロイホヒ
ヤルラアラロ○ヒヤラリイヲヒヤロルラ○ヲヒヤラトロヲイ
ヒユヤルラ○ヲヒヤライヒウイヤ○ヒウヨヨラアラライトロ
ヒウロラヒユイタウタウロ○ヒヤラリイヲヒヤロルラ（三度）
○ヒヤルウイヒヤロルラ○ヲヒヤゴトロヲイヒユヤアルラ○
ヲヒヤライヒイヤ ヒヨリイリイイヒツイヤヒウイ
タウタウロ○ヒヤウラリイ○ヲヒヤロルラ○ヒヤルウイヒ
ヤロルラ○ヲヒヤトルラ○ヲヒヤロルラ○ヲヒヤラトロヲ

イヒユヤルラ○ヲヒヤライヒウイヤ○ヒウロロラルラリラリイ
ヲヒヤルラ○ヒヤルウイヒヤロルラヲヒヤトルラヲヒヤロル
ラ○ヒヤウイヒヤロルラヲヒヤトルラヲヒヤロルラ○ヒヤ
ルウイヒヤロルラウヒヤトルラヲヒヤロルラ○ヒヤルラー
ヒヤロルラヲヒヤトルラヤリホヲ

○羯鼓ノ段

○ヒヤヒヤヒウヤア○ヒウヤアラアラアラアライ
ツウ○ラトラトラ○ラアトラアラアトヒウヤ○
ヒウヤアヒヤトル○ロルロルロウロ○ラルラトルリヤア
○ララルウラルラ○ラルラトルリヤ○ララウロウ
ヒユヤ（ニタズメ）○ヒヤヒヤビウヤア○ヒウヤウラアラアラア
ライツラ○ラトララアトラ○ラアトノヲアラアラアト
ヒウヤ○ヒウヤアヒヤトル○ロルロルロウロ○ラルヲトルリ
ヤア○ララルウラルラ○ラルラトルリヤ○ララウ
ロウヒユヤ（ニタズメ）○ヒヤヒヤビウヤア○ヒウヤアラアラ
アライツウ○ラトララアトラ○ラアトラアラアトヒ
ウヤ○ヒウヤアヒヤトル○ロルロルロウロ○ラルラトルリヤ
ア○ララルウラルラ○ラルラトルリヤ○ララウロ
ウヒユヤ（替リ平ニ吹イ二段吹ナリ）

○カ　ナリ

ヒイウヤ○リウヒヤヒヨライ○ヒヨリリ○ヒウヤヒウ
ヒヤアフタウタウタウタアウヒウイヒイウヤヲ
ヒヤロヲイ○ヒヨライヤラアラロヲイツロイヤ

○サガリハ

○ヒユアリアラア○ヲヒヤアトラア○ヲヒヤアラトウ
ヲ○ヒユヤリヤラア○ヲヒヤイヒウイヤ○ヒウロラア○ヒ
ウリウトウロ○ヒユヤヒフロ○ヒヨロルラアラヒヤトラア
○ヲヒヤアラトウロ○ヒユヤアラア○ヲヒヤイヒウイヤ○
ヒウロラア○ヒウリウトウロ○ヒユヤヒフロ○ヲヒイリ
イ○ヲヒヤアトラア○ヲヒヤアラトウロ○ヒユヤリア
○ヲヒヤイヒウイヤ○ヒウロラア○ヒウリウトウロ○
ヒユヤリフウロ（是ヲ吹返スナリ）

笛の古実ある事

序ノ舞（初段）▲（イヤ）ヒヤヒヤリ○ヒウヤラリ○ヒウルウイ
○ヒヤウウイ（二段も初段二段目おなじ）三段目▲（イヤ）ヒヤヒヤリ○ヒウヤラリ
ヒヤリ○ヒヤリフウヤラリ○ヒヤヒヨイ○ヒヤリウリ○
是ニテムスブ跡も此ニテ跡吹是ニテ謡出ル
楽ノ段ノ事○ヒイヲヒヤロルラノ初段ヒヤルウイヒヤリ
ロルラ○二段目ヒヤライイ○ヲヒヤロルラ○○三段目ヒヤルリ
ウイヒヤリ　右紙の多ナレハ段ノ初バカリ示
神楽○ラアラアライツヒヤルラ○ヒヤリウリイリ
○ヒウヤアリ（初段）▲（イヤ）ヒヤラリ○ヒヤルラア（二段目三段目同断おなじ）六段目
于ニ舞二段男ノ舞同おなじカツコ（初段）▲（イヤ）ヒヤヒヤリヒウヤ○
ヒウヤリ　ラアラアラアライツウ○二段モ三段も同
おなじ後ノ舞同おなじ

○小鼓打稽古付く事

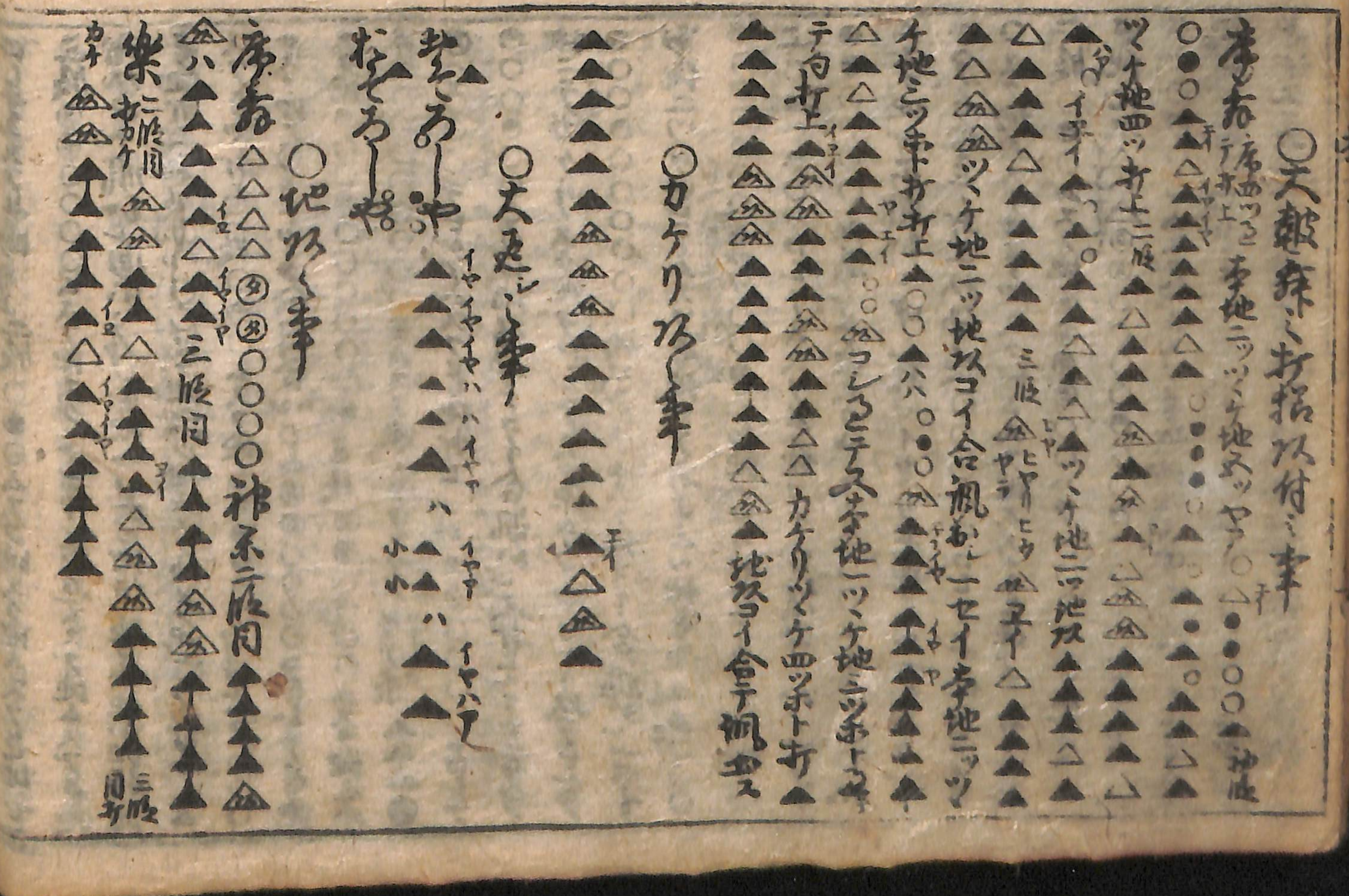
本地△（ヤ）▲（ヤ）○（ヤ）●（ハ）○（ハ）　引之▲（ヤ）●（ハ）○（ハ）
打地▲（ヤ）○（ヤ）●（ハ）○（ハ）　打切（ハヨンヤ）●（ハ）○（ハ）
ヲクリヤ○（ハ）●（ハ）△（ハ）●（ハ）○（ハ）　打上（ヤア）○（ヤハ）●（ハ）○（ハ）▲

○天皷舞ゝ打指以付ゝ事

○カケリ打ゝ事

○大返シゝ事

○地打ゝ事



序之序
神楽二段目
三段目
地二ツ
地ヲス
イヤ
ヤア
ハ
小
おそろしや
おそろしや
序之舞
楽
二段目
打カケ
三段目
同打
カケ

高砂

然れとも此松ハ其気色とこしなへに
して花葉の時をわかす四の時
いたりても一千年の色雪の中
に深く又ハ松花の色十かへりと
云へりかゝるたよりを松か枝の
ことの葉草の露の玉心をみかく
種となりて生とし生る物ことに
しき嶋の陰によるとかや
然るに長能か言葉にも有情非
情の其声皆歌にもるゝ事な
し草木土砂風声水の音まて

万物のこもる心あり春の林の
東風にうこき秋の虫の北露に
なくもみな和哥のすかたならすや
中にも此松ハ万木にすくれて
十八公のよそほひ千秋のみとり
をなして古今の色を見す始皇
の御爵にあつかる程の木なりと
て異国にも本朝にも万民これ
を賞翫すとや高砂の尾上の
鐘の音すなり暁かけて霜ハ
をけとも松かえの葉色ハ同し
深みとり立よる蔭の朝夕にかけ
とも落葉のつきせぬハまことな
り松の葉のちりうせすして色ハ
なをまさきのかつら永き世の
たとへなりける常磐木の中にも
名ハ高砂の末代のためしにも相
生の松そめてたきけに名をえたる
松かえの老木の昔あらはし
てその名をなのり給へや今ハ何
をかつゝむへき是ハ高砂住の江の
相生の松の精夫婦と現し来
りふしきやさてハ名所の
松のきとくをあらはして草木

心なけれどもかしこき世とて
土も木もわが大君の国なればい
つまでも君が代に住吉にまづ行き
てあれにて待ち申さんと夕波の汀
なるあまの小舟にうち乗りて追風
にまかせつゝ沖の方に出でにけりや
沖の方に出でにけり　ワキ上　高砂や此浦
舟に帆をあげて〱月もろ
ともに出汐の波の淡路の島かげや
遠く鳴尾の沖過ぎてはや住の江
に着きにけり〱　われ見ても久
しく成りぬ住吉の岸の姫松幾よ
経ぬらん　むつましと君は知ら
ずや瑞垣の久しき代々の
神かぐら夜の鼓の拍子をそろ
へてすゞしめ給へ宮つこたち
西の海あをきが原の波間よりあらは
れ出でし神松の春なれや残の
雪の浅香潟玉藻刈るなる岸
陰の松が根によりて腰をすれば千年
のみどり手に満てり梅花を折
てかざしにさせば二月の雪衣に落つ
ありがたの影向や月住吉の神
遊び御影を拝むあらたさよ

寒梅くの蒼姫乃姿をとぢ
かり位乃浮氷雲法もうつるなり
青海波とは是申ん祢と崇め
たまくよ錦の表のみゆくたくハ
武れげ至極来れ業　さそ方
業の　小忌衣もとのなよよ遊
魔をもちひでさしむるよよ天諸
極まる元子秋来ハ民を守も方
業来りも天命のあおお生れ雲の世
きつくの山そよのむく

難波

君鹿出れ葉羅乃れ代々をもこし
之つへ一万機の政を聞しやれし
てぢひの御心も淡のみわまよく治
めさるれらかり　君しこれ
し臣ともまる　水よく舟を浮ふ
とや高き屋にのぼりて見れば
煙立民の竈もにぎはひのよか
米穀を豊かにまくとかやけれ
くそきこしろるえれも世あの
代々よためしより申も実なか
る見んしのの野もしれわまよく
詔はれられゆるされし年月
をきこハまれし御のまかの数つ

りて君ハ舟よつれ調和なる
とかやまことやさしにきこゆ
れ実の花万葉にもこの
歌を並る君撰れわすれぬ此れ山
のいろふかうして此治の
和歌も波とかく廣まれめくし
法にも此のけより春にけさ
みけ左矢乃君か思ハ古も木も
ざんけふ難波津の歌は難波の御
の名水おん見ひと申すはわれまい
く花ひらくれに天下皆義れ
や万世の為安全ぞめぐらき

けよ前代の真乃をかく栄え
し此難波津のむかしかたりそ
れと申き　実名かし初の難
波津のかうこ乃一まわしもれや
常花義の世義常鶴をそうきん
ふしきや氷か難かれもてくんで
花の世露来をそうし給へ此
我ハ知らるや此梅乃咲る年この
共の精　今ハ人此を人ま　今を
わうハ難波津よ咲やこの花を
流しつらぬるをもとめやし
百海かハ鱼化なり今をこの花よ

あすまりしさえつりの[illegible]

梅乃宮の葉の[illegible]とりぱか

くさめやへしやツ下卯して綺羅[illegible]

表の下りてよ綺羅へ[illegible]

猶のまれの移してくれ[illegible]

あの宮の花枝と宮あの

雲の[illegible]とそのまく[illegible]

その表の[illegible]ひしよりあると

花の萬枝花はめくひくめ

[illegible]もめのうしれむしふかよもあ

表の梅の月宮をもば浦乃[illegible]

よろ[illegible]義承れれとしろや[illegible]

さすれば難波の　も八難波の

うし年を今ひらくる代の

梅花をさく[illegible]やこの花

[illegible]あり　難波[illegible]海[illegible]

[illegible]のまをし[illegible]流代とおもふ

まの里代とおもひ[illegible]

むしの御[illegible]流代

うえの[illegible]ければ　なにはつ

流代の[illegible]の[illegible]

おわひ　又[illegible]ひる[illegible]の花

よそなれ　難波の[illegible]のみち

ねおほとひと[illegible]のまのまた[illegible]

れとしみや森しめのえきみる
常盤木の付て　誠ともゆきね
ある元鶴の若ひて　うかれ
くもをかけまし君か代よかけし
流くとも　時もり松梢の　さし
君か代は　よもひさし浦なり
しらの波乃ふく　風乃音
風　樹梢代萬葉いつまでも
よろこひのさんと若むし　難波の宮
もおもね流代かのみるや
われとしろ乃高きやぐ　時の綱
まよそより　喜鶴のまとい
神風と流れ乃ぱせらして
ぎどう　秋風楽はいつもや　秋
の風流れよ波をひく世なうと行
万歳楽は　萬うつ　清涼波と六
わせうれ　波そ内は　探楽也
ぜそう乃歩ま　今うつ　今也
まよ兄今とめぐ　今の吉都波
元れめのりや押りてならつぱ
高あつのひかれて　登人流れ代よ又お
天下をまもり治まく　万歳楽で
せう元く

弓八幡

志なよ非切なる旅三人と志さり給
ひより同しく森非香乃れ梢
宮の出位と久吉安民も老よ
治まる天が下の今の年しき御衛
とやま上雲上乃同て乃下方
民よりいたるまでも樂しみの姿つきも
せんかたりと六中世も泉水中ちり
乃此直となすべきを源氏より
欽明天皇の御宇かとよぶぜん
のうさ乃郡蓮台寺の麓に
八幡宮と現れ重雲え
まで昭陽の萬乃世もつきせぬ
御代を守らんと石清水のいさぎよき
よき男山と現れし給ふ神
切なる御も遷宮の時も御祝
けい會のをとまをひて七ケ日の樂
ね御代と今三皇武天の昔乃跡
わきん郡居てよふや様あれおも
みさとみちてなかくかうし
非男山うつもや神代の跡をもよ
今もたゆまぬ海とみちゆきあを
まれ…本の枝よ金乃花を
ひもとひさくすゑ振神のみひ
七月七夜の流れ非海とて天も

又しば此神を感應の海山治まり
流代々に至りて正直の頭
なる八幡三所の神徳をめぐらし
され[illegible]宗やらひ自[illegible]来る[illegible]ぐ
ば二月の神まつり明れ神垂迹
あらはれ　や　あら新きこ世の御字
と松風の空の月乃秋ふかき姿
して恵もいのらん　祈る我ひまと
つきせぬ久しき代々よりつゞくとし
機乃織女代々と巻く今此舞ん
なるまても生るも殿門なれ乃
神とは八幡なるか此れ代々と守らんと

唯とあれ来り乗り[illegible]儀式なる
つくの祝神徳をまちてそのかとさき
けとよれぬをよおりく祝よ
御神祓をもとく奏し
おもて上るおめでたき来乃安
まて民も豊となる實むかし
家荷かくおくの曲
すこのもぞののぞよりも通
の今日遠分上下と堅さ乃来と能
ら五百八出來る月々乃八百万
代乃ことん来をうとも来る
秀かるるぎるの神とは栄まり

二月の初卯の神事なりとかや
うたへやうたへ月影さえも袖の
白木綿通ひとゝへんとも此代の恵
くもらぬ御代や貴や末世とい
ひかりも神のひかりなりよ。
めぐみあまねきおもひきた
つとりける　御代をまもりの猶盛
すなほさかゆる人の御代長の
神道天下を統しろしめすなり　寒て
神代今の世の常しへの皆の御ゆう
れ　鳳山よ宮居きて　神のひ
かり
名ゝるの　月の梅の影さ

やけき飛梅も宮の義光も花路
至芸の風草も皆神や光
匂ふけるなのめし光神鑑太
さりは八幡の神徳をゆるかなりける
神徳の隠れなかりける

老松

出現北闕の神をあはれみ給ひて
鳳闕るゝ出みり。瀧月宮殿の中
よ映し雪よ霜ともろ種門に重
輝日行幸の御よそほひ
えんよ霊の枝御垣守姫松紅
のどかなりひゞきしまれをしたれ

る乃思わり参仕之礼のひき
なりとかや申し　実や心なき草
木なりと申せども　かゝる浮世の
ことわり知るへし知るへし諸木の中
に松梅は殊に天神の御自愛にて
紅梅殿も老松も皆末社と現し
給へり　されは此二つの木の我朝よ
りもなき漢家本朝にかはらす唐
の帝の御時は国に文学さかんなれは
花の色をまし匂ひも常より増り
けり文学すたれは匂ひもなく其
色も深からす　さてこそ文を好む木
なりけりとて梅をは好文木とは付
けられたり　さて松を大夫といふ事は秦の
始皇の御狩の時天俄にかき曇り
大雨しきりに降しかは帝雨を
しのかんと小松の陰によりたまふ　此
松俄に大木となり枝をたれ葉を
ならへ木の間すき間をふさきて其
雨をもらさゝりしかは帝大夫といふ
爵をおくり給ひしより松を大夫と
申也　シテ　かやうに名高き松梅の
花も千代まての行末久しきみかき守
守るへし守るへしや神はこゝにわ

神あるし同し名ならは神木にて

もろのむも松もまたよ万歳の

ありとうや千世萬代の末とかや

ワキ 見れは[illegible]しく[illegible]

法の[illegible]ねして風ともそよく[illegible]の

御神の[illegible]ともおもらて見ん

シテ上 いかに紅梅殿[illegible]

慰め給ふへき[illegible]

シテ 梅もうらめき 松とても名も老

木の[illegible]そことゝよふる神

[illegible]

[illegible]姿も見え[illegible]けり

さす枝の さす枝の梢は

若木の花の袖 これは老木の神

松の 色も老木の神松の 千世

にやちよにさゝれ石のいはほと

苔のむすまて 苔のむすまて松竹

鶴亀の よはひをさつくる此君の

行末守れとわか神託の告を

うくる松風も梅も久しき春こそ

めてたけれ

呉服

シテ 然るに[illegible]

[illegible]

人の心すなほにして世のならひ見自
とにかく定めなるは代の光ハかはらまく
て家富民共になり　東西雲治
まりて西北の大風静かなり　[illegible]
神天皇の御宇かとよ呉国より勅
使にしたかひて来りつゝ[illegible]
あやめいとめの女婦ともへ[illegible]二
呉綾を渡来まつて西日[illegible]
[illegible]呉服乃[illegible]
いつ綾の錦をなりて乃綾れ[illegible]
衣をさまる勅[illegible]奏徳ることは我[illegible]
えとれそあり[illegible]

[illegible]の衣の袖はとかくとも名
る[illegible]山[illegible]にしては乃
ふ河かり雲井乃[illegible]をむ
わやこともなりもいともめてたけり
[illegible]紋はあふれ[illegible]まとせ
和調なるへしと[illegible]宮あ[illegible]
呉服の文字をあらはしけれ
それよりわた[illegible]と[illegible]給
今年を迎へ[illegible]をなをも[illegible]の錦
の衣[illegible]へ[illegible]の機[illegible]
北[illegible]来乃[illegible]代
おそらく[illegible]もよ[illegible]乃

くぜつしてきぬかけの衣も

らちもなくありし夜へ いつくしみえ

ものいはぬ袖しめる恋の涙

はるの夜へかへるさん そのまゝの朝顔

くれ竹のうへ 小車のうしろ

つもる朧乃衣をかさね(?)

さしかへ(?)もとりへ後も

おやともうへ待見えて鶏のこゑ

いやましてなりしかれまへ夜中

くれともつれまへ うきまたかへ

やまとの(?)わかく いまのなか

しのびもそしよしたる時のその

ひさしきそらん〳〵 君が代を

天の羽衣まれにきてなづともつきぬ

きぬ巌ながら萬世のひさよ

たま松の葉のかずさせもていはふ

なほ正木のかづらながき世のためし

ひくや若菜の紋ぺをさりける数

あか いまだ(?)もしらせさも夕波よ

おもしろそれる後の音 池をわり

はるの中の空まて宮とわかる

衣の松の上にあふ 松の風

又八数の波の音 きまり座見

ちとりの 出るや 其船のよそほ

のまわたりかやし織衣の色
やときりもふるふうにきり沈
星ちやうく呈まき異麿もおと酒
おさのおとまれ織姫のかゝに
くわうはくのきゝしゝしくなま
の糸をはおりてしけしをく
高座も気色おりふし衣もとも
らくし宝のかやを蔵しくたち
奉りけり代々の代乃まつりこと
二人の織姫呉服あやはとりく
此呉服わやものとりくわうき
とかなれ代々にもそくされ

東北

或ハ天地をうごかし鬼神を
感ぜしむるとかや和歌仏法の実
盛よりうつり時わる花の紅雲の
表乃気色しものと見えけるを種と
して王城の東北にあたり
而九重乃東北の霊地にて
の鬼門をまもりつゝ悪魔をはらふ
雲水の水上ハ又加茂川や末
白河の浪風も清き流れかな
是ハ東北院とかや寂寞とも
池のほとりに[illegible]池中の

樹陰にすまく月下の門に入[illegible]

かとくの種より咲きいでそそ

めぐりめぐりて三使ハきよくもの

ねかりつ乃関路のそく[illegible]

逢乃縁もなし[illegible]思ひあ書れ

なこうれ九重三位の君が手て

[illegible]されまりせ花かるゝ間庭乃松

の風一色乃秋に借りしそ上[illegible]

乃杖をとりかゝ池のみ梅見に行けれ

下化衆生[illegible]陰陽

の時雨もきれとふりまよりて表

わよれ表の世乃関[illegible]

梅の花ゟ[illegible]やかう色

[illegible]やかく何や[illegible]すくあく

実や衣おもし[illegible]

[illegible]今まで思ひ出

我なそ[illegible]のりく[illegible]

[illegible]

中さん[illegible]

[illegible]好文木あさそしく[illegible]

花文を好む木なるよ鶯の[illegible]

れ流時あそよ学さんうれ[illegible]

の家もまとく白氏[illegible]

ちく梅風[illegible]

是とても思ひ知らるゝ八百果にも縁
ふく月よの折ふしのきとゝ花分は
るんき秋花の春に和気香は
梅し去よとく月よの宴りを
見えし後おもひの月見んか
ゆめはさめても見せぬなり

芭蕉

縁其一枝の花かざし法の友
年なをや一念ひらく月の表
のけき雲乃月もすゝむ燭桃
まかとくの衣もよそめるとて
ろまで流法実に満ちてもかし
水にちかき楼台ハ先月を得るなり
むかう陽に逢へる花木ハ又春に逢ふこ
と安かなるを理も様しのけに
園の中面白き風情ある表色夜関秋
る風乃吹き流庭の萩の末
つそよきそよがて浪秋と流
里野ハ有るのきえまじ葉とを
れと古の花さわりし乃ある色
だゞ世の風の色も露白露の
かるぱ荻恋かき虫の声乃芭
まとの秋それもかくしかそろ
んもやさしきめかれ其

うき世の夢の中にも小鹿のなく
音ハなかりし驚かれぬる人もなし
今さら山おろしにもあはれ月は心から
なかめ来ぬる秋の風までも浮世
しをりきかなくてしのはしの
立まよふ雲ともやへきさん
今宵八月も白妙の衣
表乃襟本錦の袖露のね姿も
錦かへし　袖の紋も久堅の
久かたの天津乙女の羽衣や
我もとの世の衣の袖やそへし　舞
謡もと世の鳥の風そよくとも
ところは古へ乃わさらに住吉の
苅萱のうつ河の家のまれなれは
さて松の風吹きすさみひ
花もちりぢりに花もちり
くさもなくなれは世をあ
ほまくおかまへり

江口

あるひハ人中天上の善果をうくと
いへとも顛倒迷妄して未だ
解脱の種をうへす　或は三途
八難乃悪趣に堕して苦患にて
遠く流るゝ殺人の中まらせす

しかるに我等たまたま
うけがたき人身をうけたりといへども罪
業ふかき身と生れ殊にためしすく
なき河竹の流れの女となる前の
世の報ひまで思ひやるこそ悲しけれ
紅花の春の朝紅錦繍の山
よそほひをなすと見えしも夕の
風にさそはれ黄葉の秋の夕
纐纈の林色をふくむといへどもあし
たの霜にうつろふ松風羅月に詞を
かはす賓客もさつて来る事も
なし翠帳紅閨に枕をならべし
妹背もいつのまにかへだつらん
凡心なき草木情ある人倫いづれあはれを
のがるべきかくは思ひしりながら
或時は色にそみ貪着の思ひ浅
からず又ある時は声をきゝ愛執の心
いと深き心に思ひ口にいふ妄染の縁
となるものをげにや皆人は六塵の境に
迷ひ六根の罪をつくる事も
見る事聞く事にまよふ心なるべし
面白や実相無漏の
大海に五塵六欲の風はふかねども
随縁真如の波のたゝぬ日もなし

きゝね目もなし　波の立音を
何国へたゞりかゝる者よべとむる船
人とおもふは浮世もおもしろし　へ音
寄らし　渚もこれくやうらの浦を
籠かくすよ月宿乃網由
こともおもしなやされもへり
の君ははらぬ番よべとむかせ
人をたゆさめし秋かりそまたか
思や海るそもとからならへから
君おもへれ舟の白象とおりつゝ
思ひてれ色かはれ雲よ野のつて
あれの空よりよかなくくうら見ゆる

おりかくしつれもやれ

サシ

されとも時移り年も世の雲乱れ
とかく月のかはりゆく時
や男山乃北の岑西の山本
と捨て宮うつしてふとかせ給
露の下風木乃葉は色流れされ
きるを気散れ今は拝よ
しかるに宝樹もびんとする
れども綱をきりるくて
て漁するる浅難乃生簀まで
海難乃重宝を生れるらんの命

秋のり寒や世中ハ定めなき

久れ給青月河西かさく秦れ鳴や

乱泥のほれはうかへとすも雨れ

も果ハせらく更猫会よまゝ三日宝

ハ声くそ八橋乃雲井の松やつまさ

三五乃比や十五泥遊猶薄樹らるよ

きぬたもやもうん星月夜猫念よ

今み月又浪とし心ひしよなすれ浩

色無ひ稲葉の葉ま草ハある蝶

晴してハね行らく浅の色さ穴れ

海原の宮八泥面よ秋欲乃松風から

得とらゐ寒と露の鐘ぞ聞ゆるとや

おもしろく澄まそく更くるとも鳥の

あき稲乃稲てなは花さくよぶば独

分しは更くひとりさん三五夜中

一樹の陰や一河の水の流れも他生の縁乃

孫とも拍子とぞうくひくる

村上の御宇に琵琶

堂り長移し絃ハ又西琴乃経

合は　合てうけハ紫の松風也

ひまよる程とぞ花乃稲奉のゝ

たね夏も移ゆく紫雲とかの

とぬまさ海れ　わさ中よまや

おぬへ凡何さ淵や永る乃と隔書

壬露谷れ人のちそむしけ
めぐりて玉緒勅よりつゝ錦を
西へしハ武士の護しおゆへ
千代も色を添ふる松猶栄ゆくのえ
数りやさしくよ干をかさねて
袖とそでとの露深き玉緒の
今宵月もわかれのにかく

采女

〽旅立ハ美よりの人も霞くのれ
わき中ハ見て采女の花衣れ
かゝ笑乃ハとて見えし宮居に任れ
て見ゆ〽されハ毎ともをあとる
植られし纔かよわしきて
昔は世おりて宮ひおかれしを
當城のれかし勅よって淡海の
再ふかかりしをつ植を添へも宮
そられける海ハ未なんやとそう
まれとおしとかとやらん宮志
のみ余さりし采女なりける女の
也てきせりし衣の裳乃露れ
信よみとけ象りんそとあるは
昔よおさりぬけにり春日山のね
乃おさくハ人をかりあの宮の花ひら
萬風もおさまり雲路よあ合せ

かとこや絲上まて采女の舞

雲乃上くる高ゐつゝ花ゐるゝとふ

されおに雲の袖けに面白や雪

の梅乃酒のかりく采女の

衣乃袖をかへすゝや人の袖を衣採

とかさとをねよりまきとされたり

変れわやとかと羽衣の曲袖を返

その袂をひるかへし舞袖をかく被

縁る采女乃衣そめかるぶり王

きこゑまてあやなき寒乃かとし時流

太真まてひく迎りかねの月也て

山郭公とひはなかりまて空上

うきも極楽の月よりも来月の

かきたか雲ゐの都にも天津風

秋の都代まてよ万代とかや

しかもわか衣なれつゝも情きぬ

簪かんさしの葉乃しくありせ

そして海さの菖をくるり

あるれ袍おしと天の波の出去

あ穂よ沈流々梅なり天の流

沈の面にしよあら偏しらて彼こ

絶しありともや若葉に雲のう

て面わさうようとこうかり梅お

袖とうし采女乃出立まとあ

かとかくの御佛家の同ゐんなは、
めぐくと千へせなへやとて遂に
今よまり又佛ぞえとしそかり

楊貴妃

然るに帝玄宗はらうごうの寵
ひつかの怪りよれん光大上乃
又寿王より酒頌の宮乃気くよ。
お妙の子年待よ横ね　いらんや
をかふ宮れさひ歎れの中れが
貴れとや　秋とを年八上男の
法仙さろ御弱のちからをありてが
了れ人男よ生れさて楊家の深窓
よ屬しかれはまさに承へかり
しれ君のかたわらつね忽ち百お
し后宮よ宮あと見れば粉黛同
宛のろしひも寵つきねまハろ
乳文公勝よ性ひそり出り来て
そむあの気そらみれ家乃浴の
なまそろれわひそりぽあれられ
うきひしろそとぶひ知れ
帆わを文月の七日は歌君とあ
そせし塞役乃ひよく連理のこと
のこと指しよかる私語のぎん乃ち
其乃契りも又是ぞ…

ひかるゝかのしてや年月るゝ行く程
かゝる世中ハぜひもなおのかりせやぞ
代を人をまつてひきしもしそれを
てものれえぬ云ふ宮離そと空
時ぞ逢てそみれかりけ　相夜
の曲年引ぬの曲揃ふそ今とひ女
子　種うらかれふまろうあし
やら嬉しやひゝハ若
のおうりくはくさハ月見とう
うまひのおりんさしき真
足をぶいなりそはくハも初役ハ
卯ゟうけ過し
是
君のはひ世わひんうも菩薩
禅者うれ世かれ先もひやむ
しむうかやおのとを世のさそか
まつ流そそもうくまりする

二人静

扨も判官ハ西国に渡らんとせし流
討よむかしをおもひ小船に乗
家の子郎等へ神海上
んとせしに浦伝ひの海上に雖
風波あくまとも事不和
いと苦しく料あり
ありさまをとうしひろとら

天舞

かりそく拝しよみ奉りこのよきに
せんきはうしとかりし此山にわ
け入給ひしも法楽のそのよの
花の都を下給ひし吉野ゝ奥
夜嵐の音もせぬ花もちらす
盛とれ栄一楽のわかる路
世をもこの山を落てゆく若菜
東の奥　大峯の雪をふみわけて
まて深山よりてまた高峯の木陰に
秋にはひろふ橘の木の実に苔の露
西河の瀧のそのうちつき落て
波をくゝるもこれも花も吉野
の我ひさ法の花の色香も匂ひ
れく山の高さを仰ぎ見る月
かおかる雲く花見の山なる
まひの極楽の所のさつくね
我よみすれ　桜の月の中
も今の心よりも花や咲て
何くかしの哀も露も
かくも乃の哀の嵐よ
何事も迎よの影を見ん
とのゝ此世の奥深く山路
分それのゝかはうらし
我ねよらかされ関の年の中

さくせありしらべとふけぬ君
の種は今ぞしるらしく思ひし
なお時の流れも今やまとの風
しづ船のそこの名にぞ見返し思ひ
今はなとよしもなし思ひへ世
古も人をしくもかくまさとお
今も猶その夜の影をそれ流れ名を
[illegible]武士のやさしき浦の
おもひきれけともひつへせぬ深かきよ
咲かぬ花の春風の花とよそ

く

雛女

シテ上 風荒き船の雲ゐまでさえ人は流れ来
かくぬひし見し都の住居の名残
いろいろなれよりおもひかへしと
しておもひよれば せめて猶
やるかたなくも思はし枕に涙
らちもしてゐひより猶なみだるそ
や和歌の浦風に枕をかはす麻
のどかなるしをを海の秋とものを
同じき乃紀の貫之もかしのそれも
おのれ一世の哀れとはさりとてもせ
うきも若の浦の名のもとひをくまん
その人ひと丸山辺の赤人とも
かれら寄る偶く今の世までもすん

苦やしと秋来れ秋よりたかまの
をとぽのかとふかさうれとおもし
ことさら人心れのめてこそおもひつれ
せ様千ふる面してそふかき見え
よる流しはみさ舟の嵐も山お
ろし嵐のとあ乃き露やかさつ
うれ影も待ちのかは流はゆ見え
うまのしや　せめくへの秋風の露よ
れすゝ風乃便りとおもへども
やむれのまされて秋風ひやされき
落てうん[illegible]の露もさらにそれを
とまりとふきまして松風うよ

わりやきみハ[illegible]もあまり合せ
れ如へしもしひかれハ今こそ
世をとも人もうらむまじきや
書前の種とおもひつけひかり
ぬる乃妹女ら種をそさひしれ袖は
ける祥　月とうてをを見れ
ぞとらるわれとる種を三重の
さよ[illegible]夜の千声万声のを
めかれと文月の月日もろ乃
足秋風ふけども荻の葉の
それともれ毎よりもきそちて
のるせれ砧もなくのちより

おもしろやかくこゑのわかき
くりくかとうしれよりの興
人心ありけるをやおもひとらそう
こゝやあわてそ恋そそのまゝ
乱舞葉く

サシ
伝へきく陶朱公ハ句践を伴ひ会
稽山にこもりゐて種々の智略を
めぐらし終に呉王を亡して
句践の本意を遂げしとかや然
るに句践ハ二たび世をとり会稽の
恥を雪ぎしも陶朱功をなすとか
やされバ越の臣下にて政を身

に任せおもひのまゝにふくなると
く功成り名とげて
みしりぞくハ天の道と心得て小舟
に棹さして五湖の煙濤を翫しむ
かゝる例しも有明の月の都をふ
りすてゝ西海の波路に赴き
身の咎なきよしを歎き給ハゞ
頼朝も終にはなびく青柳の枝を
連ぬる御契りなどかハ朽ちはて
つべき唯頼め しめぢがはら
のさしもくさ我世中にあらん限
りは あくそんなへの御うけ

もがくるしみを人の知りなくもがや
それ代りお主のおためと思ひやと
とつおいつやつとくどくぞへ
せめて鄭客も我のやさしさを思ひ
あうらお泣し　辛かりしひされぬ
きくて悲しむせふれながらも
われなうらりく

ねまふ鶴

うちかんよ酒をわすてぬくねまふ
まくとや寒れかしおやなりば
玉の苦しかでしく雅を
[illegible]
せめて世の人ともおもれを
むすうらくむりかなと
されきさくへうちかぎりは
竹の葉のうぐしりのそれけり
とあおしをとさうききむしへ
めもはへおさればをほしめつ
みちかきくおれはまでも鏡の見
寿をあり上りかと島の音をも
りわたよみえれんの花くぞば
をそゝねと世のもがく許おとし
の山深のそ乃ん深めもつきん
ちやれ乏ゑ金ととも　お世の窓

望わさうし梅ハ花橘ま見えて
ぱはわしもみの[illegible]おま[illegible]乃[illegible]
のことさもりまて[illegible]のひか
まさひらき色もしろからぬはよ
ぺくの[illegible]雲乃ゐつる[illegible]を
ぶかくて時刻も梅のの雲よ乱
の都とぞなりける風さ九のう
なよ竹の葉かれなるをさと風
さうつきさこうと袖のおんよめてを
紋りある 出てをあつよう[illegible]を
ねよう世へ寺のちくぞ光源氏
ますりなよ面しらそく[illegible]乱
のおもとさ海し九山[illegible]よ月まで[illegible]の
ふく[illegible]よかしく袖も露かくに
[illegible]りしさ面も結ふかよく

鄭之家

甚好色之家のおもひかとくりをお
とうへし[illegible]乃世や猶ぶくを
名結ひけり さそしもおもね
男乃[illegible]の 光源氏乃ゆかり
色[illegible]ひきのハまゆきかよ 今為
まれおさゆへん 又もつくの平
ありし九[illegible]流しみむよはさます
九さひ果結乃守（ヤウ）ふるき[illegible]のしま

よが入海れへしとおれあうたり
や猿れ名乃かゞとわへ宮の姿も
里とくて花咲風のひらきまでもと
ざひし汎乃とくて嫌乃れし鳴て
てあぶあくて墓ひよがもくさせ
あさひの橋世けく稽しの河流
由もあくの浦乃うら絶薪
あさ日山つら出桜 おく梅かけ
て川波のがま蘆のよる岸に
の水よさそうれく桜くちとる
川八重流乃波よね止くさを係舟
まし誰ら何もうんのどとりて

ひゆくと色元めしかれと秋と
子乃作の初織よれもひんしん
くそ流かり来れ実や偶そ
めぐるよ雄人なるぬ流ろし汎ま去
さ名の錦や 名聞もとひ
わが身とて憂しのはやよ
そよきいまをしれく分し
同上
名もなき身そやとはせ錦や
わが身とはけれ嫌しさやあさ
てなさをしろあらても 同 まうて
久しき旅の名乃 流身はあらも
同下
雑かりと 夕暮の錦の風露乃

まの夕附夜影かすかなる木の
下の黒木乃鳥井の二柱に立
かくれて失にけり跡立かくれ失にけり
ワキ　片敷や森の木陰の苔
衣　同し色なる草莚思ひを
のべて夜もすがら彼御跡をとふら
とかや　シテ　野の宮の秋の千
種乃花車我も昔にめぐりきに
けり　ワキ上　ふしぎやな月の光も幽
かなる車の音のちかつく方を見れ
ば網代の下すだれ思ひかけざる有様
ありさまなりいかなる人にてましますぞ
シテ　[illegible]われいつの
車争ひ　シテ　[illegible]車と云世
我ハ思ひ出たり賀茂の
祭の車争ひ主ハたれとも
白露の　ワキ　所せきまで立ならぶ
る　シテ　物見車のさま／＼に殊
にときめく葵のうへ乃　御車とて
人をはらひ立さはきたる中に
シテ　身ハ小車のやるかたもなしと答へ
て立置　ワキ　車の前後に
シテ　はつとよりて　同上　人々轅にとりつゝ
人たまひのおくにおしやられて

見車の力もなき身の程ぞ思
ひしられたるよしや思へば何ごとも
報ひの罪によもれじ身は猶
うしの小車の廻りめぐりてきても
までぞ妄執をはらし給へ
昔を思ふ花の袖月にと返
すけしきかな　野宮の月も昔やおも
ふらん　影さびしくも森の下
露森の下露　身の置所も
あはれ昔の庭のたゝずまひ
よそにぞかはるけしきもかり
なる小柴垣　露うちはらひ
とはれし我もその人もたゞ夢の世と
ふりゆく跡なるに誰松虫の音は
りんりんとして風茫々たる野宮
の夜すがら懐かしや　こゝはもとより
忝くも神風や伊勢の
内外の鳥居に出入姿は生死の
道を神はうけずや思ふらんと又車
にうちのりて火宅の門をやいでぬ
らん火宅の門を

定家

今は玉の緒よ絶えなば絶えね
ながらへば忍ぶる事のよわるなる心の

秋の花さて九種ハ生ぬし聲う
そてふれくり中とめりて莫
也とおもひさりし此の人そて
とかれ氣立ばわちの椅
思くぜしなりめし山わぬの袴
深の身れひらしき九頭あしこれ波
あやめ乃やさしれ意めしもぞ
おりなれ身られとも稀やうけと
もなりよ乃ん乃登り乃らん
なるそのかれしきつひとすれとわ
こよせのわさあ弟乃名なれて
よしやさまんぞ宮乃もしもとそ
月の名も雲乃上ひら雅そてし出
の深きてめん次そ深く九まりまよ
けむあなりけくともらふもわちん今
やかし花君ろうしての光の雲乃雲と儀
しらんかまくをへつて河桃人の望
無くうとすんなかりて武山のわちん
ちとかへんぶなりてもかゝりて匪比
表のべこれまゐかしとむらの数
もひとりよつ家紫よ清く濱ら
桃とぬきてまへ唐ちかまりかゝりとせ
ほうらしよくしうか色額なく氏ち
とりわや座ぬみられやらん

シテ上 徒らくもなき身の行ハわさらお
身よ樵あし名しうりハあハても
木のしても白見 らしや暮まの里
のみこそらこのはかよそ名とも
シテ 今ハつよし ひとへわびてこそ
問叡立見しかへしあれ大宿と
の姿ハかけるそれなるよの泊ことらは
それともえしぬ藻刈るしらに
捨逆縁ハとひかとし見しらく冬なら
ぐ ワキ 夕も今は月はゝく
松風ふけて夜の光芽の落る
夜乃身を鉛ひのはつるとくよ
身ふ法そ海士となる〳〵 若木の
とよ寓乃う〳〵れ名月の西にかゝと
凡る嵐の声で苔ニ君ハ松風薙
月よ夜と共に影深に晦ます
らさらし〳〵 ワキ さぬくあら〳〵侘
のとえ シテ 花も我かもいろく物
ワキ おしなの雲 シテ 夕の風やかると
色と乃香も霞もうへもまね
ろも花よ世の世とあらく
シテ下 松も梅も竹中く乃香れは
ら須磨の若木てぞさへ見る
定めなきも見るや浪の

いろいろの法の便やなれいめいみえて
やし佛平等説如一味雨随衆生性
受不同「れ滋草よ有おゝ流乃
云名しるの花も花も木もまことの
定あそびわるゝよ有を三ちうれてそ
すらぐ浮は九をもよみてそ
唯今讀誦し給ふは薬草喩品よ
よなよ　ワキ「中々なれや此御典
ふ草木もわくされハ桃仏の門
ら出のけをみて仏乃あるを若ん
「へしわくし見難やあるまじく
ぎそめなる法のちぞう　ワキ「わきま
疑ふ露のめぐみをうけて「ぶ
つもなく三川とかき一味乃雨
法のあはれをうけ悟うかなひて
草木国土悉皆成仏のきざし見えぬれ
は空も頼もしや山河草木やや猶
くもそけいわれはなかなかくと
女輪車乃わか恵とわかるあらすまま
此殿をのいさ風しぞし雲のの
ふの袖すも今ぞのをなるも露
のちゝ衣「れも見乃霜九のちゝ衣
やなま葉楓もなのの出乃あるゝ涙
かれもなやかれも見えなかなし

跡かりかしのり代し寺ハ凡のかれ
しせと内書のし世らハ花乃ますを
こも　めらかるしなの家と浸て
と浮さかやつさ乃と九葛城の神を
いさ孤りやよしかやおきの契り
の中にうらみわりつるやと九人を
昔乃哥のかしこくぞ人ハみするる
かやや宮あるうりごとハまとうるや宮
岩ろうぞ人ハまとうる座宮あるう
ら乃じりなかしとおもひらひれて
うせりけり

其比ハ紀の有常か娘と契り妹背の
心あさからさりしに又河内の國高安
の里にしる人ありて二道に忍ひて通ひ
給ひしに　風ふけハ沖つ白浪龍田山
夜半にや君かひとりゆくらん
とおほつかなミの夜の道行衛を
思ふ心とけて余所の契りハかれ〳〵
なり　実情しるうたかたの
あハれをのへしもことハりなり　昔ハ
國に住む人のありけるか宿をならへて
門の前井筒によりてうなゐ
子の友たちかたらひて互に影を

面をならべ袖をかけ心の
水もそこひなくうつる月日も重なりて
おとなしく恥かはしく
互に今は成にけりその後かのまめ男
詞の露の玉章の心の花も色そひ
て筒井筒井筒にかけしま
ろがたけ生にけらしな妹見ざる間に
と詠みて送りける程にその時女も
くらべこしふりわけ髪
も肩過ぬ君ならずして誰かあぐ
べきと互に詠みし故なれや筒井
筒の女とも聞えしは有常が娘の
古き名なるべし　げにやふり
にし物語きけば妙なる有様のあ
やしや名のり給へや　シテ上　誠は我は
恋衣紀の有常が娘ともいさ
白波の龍田山夜半にまぎれて来たり
不思議やさては龍田山
色にぞ出づる紅葉葉の紀の有
常が娘とも又は井筒の女とも
シテ　恥かしながら我なりと
いふやしめ縄の長き世を契りし年は筒
井筒井筒の陰にかくれけり
ワキ　更行や在原寺の夜の月昔

と云五文字を句の上に置て旅
行の心を詠しなり
数かぎりもなき名にしそれ程あ
どれ縁なる人を待かりけるに
懐しと称されたる人まつ女ともい
はれしありはらの作、杜若のひか
りもがあらし沈よ山と年を経て
とふ世よ業平乃形見の直衣
着重てかさねしや昔男にうつり
まひ宮仕迎ても花の種 家よ
きて若紫とも東乃ちぎれ
あるは人とや言はれけれ

風なれは妻やむらしと思ひ
もどりの人に折ける杜若
つ杜若よりけし　[illegible]
むしよましも[illegible]　[illegible]よろるぞや
されしものたえし昔男の冠直
衣も女とも見えじ男なりけり
業平の面影[illegible]
我身なりしたなうしや[illegible]の
梢も音める花の[illegible]
ひ蝉のまく唐衣[illegible]乃袖も白
のくとぬる古巣の雲風も色
蕉葉乃夢も破れて覚めにけり

蓬か杣まてさえ見えけり

佛原

風ゟ先たち祇王とめしおかれく

推参のてうあいもれはうしくて

かみをとめさる女ことはの祇王か

嵐お元より乃ほい蔵王乃うら

立さして何かしく女のとくぬ

しれ　同出さるもおもえく祇れ

おもはれしよりはいかうてか

しれ祇王ハ出されゑしせて

世の秋風のふきく風の露

のちやもしほれ

萌出も枯しうる世かれ祇王かりて

より出るなくの花の時のさかりなれ

も散るをまつとしらんや嵐ハ松

其様御中のりと見る世の川たけき

めからとりんきき世そと思へひるわ

あの事をとあすかれとも是ハ

とてもかゝる阿弥陀の御声をまれ

なむと祈りをつけく頼むやいなせの

さらさら絶へ捨つ元祇王乃庵にいられ

祇のかゝれを怠しと思ひてみ出分れ

かる作れあの信をうへ事りこうに

ともに降り来るく衣の袖とる

ねまと花と波まて降しきの桃ん
はあるれ共も座敷の今や今こそ
御るけ七ほくらの御さとて殿上へ
まさ合さ前へ入とかうとそうの池
ひとしかうりろさ花しま花ぬ瑜台
松さこひ露ふれ対いつ此〔[illegible]〕ん
栽たかとの岩代の松もむかしちよ
家々君の行末を御やとこひ露よ
行末いつくと何方へ松さ見へよとハ
同上
此松の栄れいかりあれや
同上
残乃君まてく栄窓のわしよ
[illegible]まさるけなるよ
亀苑ヶ池の家かゝまゝ雲井の内よ
はるかに松風も見せ此君の
ぐまのうか緑の年も新しき
春て若色もとしの松さふ老ふう
さえく和しま雅の光よ
らひまむ明方ふもと此中し金あるる
のちまとはくれひ此とり麗ゝ
そうし花露しましきゝの緑の葉
若くらし海し路ふかよ鳴し
きやかなり水のかの枕ゝ花あ
亀さ代へしおへいるゝ海きてつ乃
此君の御春まて祝海しまする

〽あつしかゝしいかし〽の仏とられ
し名残人まのわれいづくへか帰るも
飛鳥とみれ〽極楽世界の風光
工衆〽仏事はさらにや〽山深の
〽仏の出世なる種〽善悪も
ひく気色もなく〽猿猴も人々
頭名と称へんとのく助る法の
情への道も力もなく行の世
をさやおかちもとぬ〽後仏は堂は
ありまし蓑の中なる〽此世の
あらそや様もひきちぬると書
とや杖世はかうなるまゝ通り
しの臨むうちそやとけとかまし
渡して居ると〽わしし焔雲水
の見える大きな御法の弥の家え
しめとは伝とう恵を著の種一歩。
わけさる説も仏のまれとへ
いつ迄まれとらし入をそこせん
そりやく

杜若

キリ
〽昔をとこ初冠（ウイカフリ）して奈良の京。
春日の里にしるよしして狩に
いにけり仁明天皇の御宇かとよ。
いともかしこき勅をうけて大内山

の長霧が上に[illegible]て[illegible]めれ
ろ[illegible]日の宮は和光して[illegible]ひ
ひの冠を授る故[illegible]の恵み[illegible]
[illegible]道[illegible]ゆく乃え[illegible]の中[illegible]
[illegible]あるれよ[illegible]冠とやど[illegible]と
[illegible]や[illegible]とせ中のさ[illegible]ひなさ
[illegible]八[illegible]なり
なる宮乃[illegible]位なれりしとそ
[illegible]の[illegible]れの[illegible]や尾張の
[illegible]つへよ三[illegible]をみんとくいてしく
[illegible]れ[illegible]しき[illegible]
しくとぞ渡る[illegible]れしとて[illegible]
[illegible]なる浅[illegible]
[illegible]の[illegible]しれ[illegible]て[illegible]
信濃なる浅間の嶽に立煙
遠近人の見やはとがめぬと口を
さひ打寄し[illegible]旅衣三河の国に[illegible]
しの八[illegible]も名にある八橋の[illegible]
まだ見[illegible]杜若花紫の[illegible]
つまわか[illegible]やとし[illegible]ひそある君へ[illegible]
此物語を[illegible]ゆく見
[illegible]八橋や三河乃[illegible]とこ[illegible]
[illegible]しの数とよ名[illegible]人
くべ[illegible]の[illegible]に[illegible]の[illegible]

乱れて飛蛍の雲乃上まて往ぬ
べくハ秋風ふくとかりに現れ衆
生済度の我そとハ知るやいなや世の
人乃暗きにゆかぬ有明乃光あ
まねき月やあらぬ春や昔の春
ならぬ我身ひとつハもとの身にし
て本覚真如の身を分陰陽の神
といはれしも唯業平の事そか
しかやうに申物語うたかはせ給ふな旅人
遥々きぬる唐衣きつゝや
まひをかなつらん花前に蝶まふ
[illegible]
金植置し昔乃宿の杜若
色はかりこそ昔なりけれ色
はかりこそ昔男の名をとめ
し花橘の匂ひうつるあやめの鬘
の色ハいつれ似たりや似
たり杜若花あやめ梢に鳴くハ
蝉のから衣乃袖白妙の卯の
花の雪の夜もしら〲とあくる
しのゝめのあさ紫の杜若乃花もさ
とりの心ひらけてすはや今こそ
草木国土すはや今こそ草木
国土悉皆成仏の御法をえてこそ
帰

ちりもこし[illegible]の花あや[illegible]
さゝかや[illegible]山ありく中[illegible]空
つる[illegible]も[illegible]と申[illegible]せ[illegible]
くいさらて[illegible]もさらく
月もそれはわしつ[illegible]
の[illegible]とき中[illegible]法[illegible]と
あるゝされ[illegible]女[illegible]
のたえしかれ[illegible]とけしと見られ
[illegible]今[illegible]ふしきの[illegible]
かの[illegible]のわとおく[illegible]へて[illegible]
とよ ワキ きやも[illegible]の[illegible]れ
おしへ[illegible]
[illegible]の[illegible]乃[illegible]を見[illegible]
[illegible]乃世語[illegible]けく[illegible]
凡[illegible]宮も[illegible]と見[illegible]の
[illegible]とかりて ワキ 池へ[illegible] シテ
それく[illegible]る松の影[illegible]
見さ[illegible]しと[illegible]
[illegible]れしか ワキ さもあらは[illegible]
[illegible] シテ [illegible]のみ[illegible]
れくる[illegible]とそれともう[illegible]
く[illegible]まゝ[illegible]
も[illegible]ちこり[illegible]
[illegible]しとれ 地上 お僧の今[illegible]

よろこびくわんぎしてまひてや上

文殊のちゑのまなこ　普賢法花の

たかきもふかきも変来[illegible]

すれ解脱の衣の袖かへしことよ

ひるがへしいかなるかとあへんとを

かりようびんの声風のみかさね微妙

雲井おほひもかゝやきのあかりち

よろこびあるそとなみのこゑにけ

て雲の上にまふとせし事

小謡

其[illegible]ひとやいさく[illegible]

[illegible]よしかくしかけ[illegible]

ともしびの影の[illegible]

すいりうその[illegible]

れなるそや[illegible]

[illegible]それ[illegible]

しれ陰陽の道よりちかうれ

[illegible]乱れそめ[illegible]なくれ

[illegible]も[illegible]

くしありとも衣きうされ

しつまりわたりてぱつとはるくされ

かきそふれむけやうにて

北斗の星の[illegible]

つきかけしかりつるのかや

[illegible]

[illegible]

[illegible]小塩[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]小塩の山風[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の月[illegible]

雲林院

[illegible]ハ弘徽殿の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]月八[illegible]

[illegible]

[illegible]我[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まあ男しく〳〵光の一まゝのみの名
も海べわたりともそをいふべくすに
かの称やぞ乃ちくなるらくさも
かうきぬの袂を翻しなれ
ミ舞ひあるやさしくれのそも何
もとや今くいらしおわお波よする
春雨なる天浪し縫くもら金を
どうぞかくをもたらも
海のひかり　月ひかり　舞楽の曲
かくとまそくを[illegible]まる　夜禄の
舞楽も時うつり　夜深の月
も山わるの迷へとも妻はつきう
まくらひわから彼もともつらし
松の葉かりうせとく末の世ぞ
も信あ海ぞ乃象かのかうをあれ
がるるいふへの世のやうらが
るゆるもとりしさむる夢と覚
かりやさむる夢となりけり

羽衣

然るに月宮殿のありさま玉斧の
修理とこしなへにして白衣黒衣の
天人の数を三五にわかつて一月夜々の
天乙女奉仕を定め役をなす
我も数ある天乙女　月の桂の身をわけて

にあつまの駿河舞世に伝へたる曲
とかや　春霞たなひきにけりひさ
方の月乃桂の花やさく花かつら
色めくハ春のしるしや面白やあまな
らで爰も妙なり天津風雲のかよひ路
吹とちよ乙女の姿しはしとゝまりて
此松原乃春のいろを三保か崎月清
見かた富士の雪いつれや春乃曙
たくひ浪も松風ものとかなる浦の
有様其上天地ハ何を隔てむ玉垣乃
内外の神乃御末にて月もくもら
ぬ日の本や　シテ上　君か代ハ天の羽衣まれ
にきてなつともつきぬいはほそと聞
も妙なり東歌聲をそへて數々の
笙笛琴箜篌孤雲の外にみちみちて
落日の紅ハ蘇命路の山をうつして
みとりハ波に浮嶋かはらふ嵐
に花ふりて實に雪を廻らす白雲乃
袖そ妙なる　南無歸命月天子本地
大勢至　あつまあそひの舞乃曲
シテ上　或ハ天津御そらのみとりの衣
同上　又ハ春立かすみの衣　色香も妙なり
乙女の裳　左右左　左右さつさつの花
をかさしの天の羽袖なひくも返すも

霞の袖あつま徒ひの粧よく

も色も月乃かつらにかさぬる中にも

凡及満升光秋の秋とやいはれぬ落

金谷秋七宝光満乃甕をふくし

其たれをやとくしかも去程かつ

極門乃天の羽衣風によそかひに

かひく三種乃玄景浮島か霊おほ

しらか山や富士の高根かをそれに

くる浦えそれに紫雲よ乱れて

うせよかり

芸和る

刹那のかりの住居のゆめの世

ありそれも和光乃利益広く一称

玄賀わくれくる流正源底乃流や

なるらんそれも西国なるほす

浄土よ再ひかむく本迹門極の

其世乃かつまれ筆秋なる

山孤雲れくなれや登流来迎

日乃おとや若王熊山乃渡る法花

一称今為よの深き来迎眼根

われく安浄来現世世々出世

並国一称為るや衆生の極楽世

蔵秋来御の光よう世乃人代成

力まかう死法乃れあまの利益

さても澄るは花よりも出てく
きよしと種とするなりたまへや
あはれまよひの雲もやうやう晴
の月和尚も宮も皆もろともに
唯今の浄土といひ捨るとおもひ
かゝる歌舞の菩薩のごとくよ
仏事をなせる心なれ我もかとれの
これ名を得ぬるの見ん衆極楽法の場
くのれ陰陽法乃主くの剣もわ
かり構名の能し とられひくれ
劇楽乃家其真堂へして 花ふ
御念の地やと言しもましれ
よろつの利益なれと菩薩流れの
よ花ひて何事よ代乱を皆同
これしかれなれる声揚の

西行桜

九重にさきとも花の八重さくら
いく世の春を重ねらん 然るに花
の名たかきは先初花をいそくなる
近衛殿の糸桜見わたせは柳
桜をこきまぜて都は春の錦
燦爛たり千本の桜を植置其色を
所の名に見する千本の花盛り雲路
や雪に残るらん毘沙門堂の花盛

四王天の栄花も是にいかてまさる
へき上なる黒谷下河原昔遍照僧
正の浮世をいとひし花の山鷲の
御山の花の色かれにし鶴の林まて
思ひしられてあはれなり清水寺の
地主の花も松吹風の音羽山こゝは又嵐
山となせにおつる瀧浪も
花は大井川井せきに雪やかゝるらん
[illegible]後夜の鐘[illegible]
あら名残おしの夜遊や[illegible]
おしむへしおしむへし得かたきは
時逢かたきは友なるへし春宵一刻
直千金花に清香月に影春乃
夜の花の影より明けそめて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
よそはまた小倉の山かけに残る
嵐も雪も散しくや花をふんては同しく
おしむ少年の春の夜は明けにけりや
翁さひて跡もなし翁さひて跡
もなし

川は花にうつらんず[illegible]の舟か
かゝるや[illegible]萬葉れ[illegible]根うしぎく
や[illegible]く風の青柳の一[illegible]の一葉れ
上の[illegible]乃[illegible]く[illegible]
[illegible]ありがたくも有る身の[illegible]
も御の[illegible]かしもや[illegible]家
花清[illegible]の御[illegible]
と[illegible]せぬ[illegible]ぞの
[illegible]陽や清[illegible]の[illegible]秋の月は
[illegible]化し衆生を[illegible]のう[illegible]水上
は[illegible]の[illegible]と[illegible]御[illegible]
[illegible]御[illegible]まと[illegible]
ね音ともめぐり生ずれなるみちを
としこそ[illegible]かりされば都の花盛
大宮人の御遊にも蹴鞠の庭の面
四本の木陰枝垂れて暮に数ある沓の
音柏木の衛門の督の昔を思ふ
[illegible]の花やかなる[illegible]
[illegible]の[illegible]ひきつなも長き思
もならの葉のその柏木の及
びなき恋路もよしなしや
是は老いたる柳色の狩衣
も風折も風にたゞよふ足もとの
よはきもよしや老木の柳気力なうして

よへくしだきまかもと多へを垂れ給へる
それなら御法をなれ　御法乃力
迷はぬ月の清き法ゆへ舞の袖
すくひとつゝ羽風の音　御花雲
とそれもわかるゝ　御乃曲と妙
露乃前栽の袖と返し白妙の
御法のうけよろこぶ舞の袖も
とありし舞乃洞の戸をも開き
花の御乃　朧やさんとつきの名
と鳴　別の曲より　御像をと見ゆ
ありし羽御乃　御もとを見やれ
法の花ぞ乃

あくしけれ風やいとみとぞえよ
わけをまかくよくくとた
春の御朧夜の夜乃花乃袖の
一乗乃縁も仏生の縁を得ての
法界所説の風打払霧も木乃花の
花よ浮雲も木乃花の空となれ
かくしておほくらなきを散りにける

湯谷

花前に蝶舞紛〻たる雪柳上に
鶯飛片〻たる金花は流水に随つて
香の来る事も疾し鐘は寒雲を隔て
声の到る事遅し　清める

の鐘乃声祇園精舎をあらはし諸
行無常乃声やらん地主権現の
花の色沙羅双樹乃ことわり
生者必滅の世乃習ひ実にためし
ある粧ひ仏ももとは捨てし世の半ば
雲に上見えぬ鷲の御山の名を残す
寺は桂の橋柱立出て峰の雲
花やあらぬ初桜の祇園林下河原
シテ上 南を遥かに眺むれば大悲擁護
乃薄霞熊野権現乃移ります
御名も同じ今熊野稲荷の山の
薄紅葉の青かりし葉の秋又
の春は清水のたゞ頼め頼もしき春も千々の花盛
もち[illegible]花盛山乃桜花[illegible]の
花乃[illegible]とぞ見ゆる シテ いかに
[illegible]候 ワキ 何と[illegible]
や[illegible]舞を[illegible]まひ候 シテ [illegible]
舞をまへと候や ワキ 中々の事
シテ のふ〳〵俄に村雨して花乃散候ぞや
[illegible] ワキ 実に今の村雨に花は散候
[illegible]の雨[illegible] シテ 今[illegible]
[illegible]
[illegible]春雨の降は涙か
桜散を惜まぬ人やある
ワキ 実[illegible]

やかてひとつ小河の流れわきまへん
迷ひもいろ／＼せんかたの表を[illegible]と
シテ〽あまりしものなやなからん　ワキ〽実
表に狂気のありしほとはやう／＼晴と
らせるかなきそく[illegible]尋ねはなし
〽[illegible]れ[illegible]と[illegible]　ワキ〽[illegible]
[illegible]わか[illegible]　シテ〽わらはか狂
やすらかにめをとも[illegible]れ[illegible]
もとのことくにやすらかに帰る
やすらかに[illegible]て[illegible]よ[illegible]と[illegible]
ともやれ[illegible]の[illegible]ひ[illegible]
いよ／＼家の名も[illegible]
てらの[illegible]
の実の[illegible]とさへ[illegible]して[illegible]
山まて花も[illegible]金の[illegible]
[illegible]を[illegible]海る家の[illegible]れ

松風

シテ〽わくるやうな海ゆくも又なの
のよるの[illegible]伝へ松風も村雨も[illegible]
のこぬまてよ[illegible]な[illegible]
ぬ夜さ[illegible]風のおもかけ[illegible]
う秋[illegible]ひく[illegible]
露も[illegible]ひも乱れ[illegible]
なれ衣の[illegible]の月も[illegible]

くれ竹の声とけも波の上に表れ

消しう[illegible]の君[illegible]わたれいけりとや

[illegible]とへしや[illegible]年[illegible]

云三年[illegible]しと海のうし[illegible]

給ひしは[illegible]ることそ[illegible]

かし精衣[illegible]と自[illegible]

[illegible]るひよ[illegible]のまひ[illegible]

れ結[illegible]の[illegible]とも[illegible]

わらさ[illegible]れん[illegible]わ[illegible]

もかく[illegible]とも[illegible]

しをとらやかを[illegible]ひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

うき世[illegible]

[illegible]

[illegible]

けよ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うき世川[illegible]と浅瀬の[illegible]流れ[illegible]

[illegible]の瀬[illegible]わ

たまてや[illegible]の雲居よ[illegible]の[illegible]

[illegible]の雲風とめられさや[illegible]

ひくまでよ わし浅ましやれ

松の[illegible]よ[illegible]の[illegible]

つくの露をやくの種乱され
然ハねもやおれハ去てもはや年
ハれ言もさハね[illegible]おろ乃
人のひのやおわ乃書もそハゆよ
年とひ年ちし出刊わくともわ
ちときう海うこんと[illegible]孫まひ
しらのえつる実か乱れ
てさお[illegible]もあとひ年るとおろ
御よもむさこんとのもろやなど
川かさちるれを松風の海つと
んれすとつまで　絃のもさつ[illegible]
東の[illegible]しかとも

武まつてきうもれなの
りのつ[illegible]流がや去りれ[illegible]
もの山北紙よおあるまりやきろ
今海うとくんそれハ[illegible]にれ松
毛なかつし去てよ次テの浦も
の去乃引至海[illegible]紙も[illegible]
まいさ去すりそそかれ去のかり
うや去よ吹く浦風も[illegible]
てむ海のうろ浦もあし[illegible]
ら[illegible]桃乃[illegible]ねるかり我
紫とひてひま[illegible]海ろ浦の
やと[illegible]海のうしかけく[illegible]

かれ山より閑寂の音も遠く
れきも絶なく秋もわきまく河海
とぼしびさえても嵐とゝう
やのこるらん

芦刈

〽ふるも男山の昔を思ひおこく女郎
花の時をくねるとも歌をばなさ
むる言の葉もたゞよ遊覧あ
ずとの契り深き浪の浅かり
ける難波の事　〽されども浅
〽今ずさをとりて霞みなれの
花も仮名の道難波津に咲
〽やこの花冬こもり今は春邊と咲
ばかりと云ひよる代は法に定
とりまさかひし雉鳩の風も
の風にあはあのそのし竈女
乃筆より我をとふるそのへしれ
とよびそおふ今の所れ海
然れよりわかれ花咲の露
数多の種より穂まとれは
かふらぬ歌もし緒しかれ
たあおよそ全しやアき武なの
んかくもりし主婦の情あるも
〽身のとよそてきたうや濃の出

の難波の春は夢なれや芦の
枯葉によ風しもとさ波の立居の様
ところも所るへしやにさうしの濃
の芦あもとつしにくともゆ
ば乃つるさせめや堂めもくあを夜
あし知難波の浦と打きれおぬ
し鼓のよ洞のわらんんぞ嫌
しわの名れ実やいとせ乃中
こしへの家事まれまつきるさあ
むや難の咏んや武とあま
かぞそ難波江のいつもて
難しわられは迎久行悟されれ
梅もあのや盛上とんとて葉
の露は置きりくよぶれ重や
梅ヶ枝の匂ひもあら兄彼らか
めてられわうれもつらしれ海之
匂ひも深る彼らか木浮世あて
難波江のく盡のわ事ぞ面
あ色波も同ヒ御り花も盛よ
津の国れヤ乃何花れ宅とめり
冷差の狭れ宅よぶを満れ行る
や大伴乃みの浦とれらお英
見れ海る乃あもられしけ至

蘆之

シテ〽さては我先祖をたのもしく[illegible]
ぬる着れさしてはなれ給ふと候
優なりけれ我らが時節のへかくれ
無き後をも[illegible]片時なりと
ともなく〽納衣の[illegible]衣の上
まとひせず[illegible]して座しぬ
しれずあく[illegible]いきうわきさ[illegible]
よろこびみ[illegible]てんきまぬかう
られ[illegible]とも八旬よろこびあひと
久しき[illegible]を待つの心の[illegible]
どは水無月の[illegible]とれ[illegible]
のほ[illegible]
是まで我は清閑東山の麓に
乃わりうありて汲みぬれ来りたらば
ありけふ大夫の折節かゝしあり
聞ん嘆きありとも我ぞ会
とる時気の上ようかん風あるの上
シテ上〽元暦元年月代の中空に
今ぞ我も今は[illegible]らんかをとゞめ
下秋のころよみ給ひしとかや
暮れ[illegible]あれたり[illegible]とく
嵐も秋の心ばかりかれね
[illegible]たに残りの夜も明
〽長き[illegible]わるる[illegible]

ほりかへし　千とせを盤久へとゝらにかの

是ゑらへらしてゆうへ見へよとめりて

流おとさぬれしいら盤久る

ちよもせ流菴とわきいづる

まし　せんかうとかれ盤久へうす

歳へよ秋万業の末よいはふとも

流を下されし經文を也

そも菊の水　花をうけるゆへし

（ワキ）汲かめ　いつくしき盤久へ　（シテ）流る名よ流

もりひさしく年高き後代の御代異あ

道参や新旅乃憩秘の菱

さもあれらへもみなくり

とけりけ流泉の流布みなと

まさる乃盤久へ一曲ひとかなく乃舞

実東にも陽あり祥変も陰

のれるれも燈るも乱菩也

（シテ）ひそ久行此　（ワキ）絶と流おそ露

とまと仙　中くのす　（シテ）都

しくばこれ時ざりつ水宰相

あの登を時蒸よわ筆世ありて

一　流るみのすれぼ母りかぬ路

れや云池満乃らのとらなあまぞ

同のあ之れやらつの来も此ると

あ酒宴あるその表れはらく

くり 白菊のしもや[illegible]
秋の露の[illegible]菊の[illegible]
世にしも[illegible]のかほり[illegible]
されば[illegible]
しかも[illegible]の月[illegible]
さし
具や現世の[illegible]
[illegible]今よりも[illegible]の
[illegible]年月の夜の[illegible]
十日余り大難を遁るる[illegible]
此花の[illegible]されば千年余の
かかる[illegible]

わか[illegible]
御代の[illegible]
[illegible]
あめ山酈縣山[illegible]
のふ[illegible]の[illegible]の
[illegible]
世の[illegible]
の中[illegible]
や[illegible]
[illegible]
つ[illegible]
周[illegible]

六十五

こも深き世なれとも[illegible]ほとの
[illegible]は待ちて世に人を[illegible]し
て候身はやすしの世よゆるさ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]世も[illegible]
[illegible]の菊の露わかうめの[illegible]
あや　寅しも[illegible]人[illegible]の
重ねて[illegible]
ても[illegible]
あかめる菊の[illegible]
めくるとしの[illegible]

まことに[illegible]菊の葉の酒と
のみよ[illegible]面白や[illegible]よく菊
[illegible]流れの[illegible]曲水の盃
[illegible]
より[illegible]
[illegible]
ひく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の尾[illegible]の[illegible]

言紀しもよの意でありける

錦木

中つる江ひちとうかるよ程と君
思ひ染めこの小侍乃錦よまさるへ
錦細布や錦木あの手に人百夜とふ
ゆかりも比桃くべきもつきし
ま此今へ過て恋路よりのて好な
比無き比興の加力とえん機織の
姿恋中に殺とおくもかり事
おつとに錦木をとこむすめ
細布のせばき胸乃あはぬとふ
まゝ錦木は立なから朽て消れ
わるもとふそれ数も中道の事比と
さしもそしめくせく夜も玩よ成るれ
たまをつくして立てたる思ひの恋の
猶色つきり玩く錦木の立てるる
かくてあまりのへかりし千夜百夜
ちかてそれ比もまする人玩よ錦木は
機まえ秘ハ立をひく夜中の深く
名のみみるるや其の錦木をたて渡
木をとれあひおき機の
しうりさつめく百夜もきれし其
お錦さんにめくしれれるみの世
ちつき重ねのとぷら比恋あまりそ

くてこそ深奥の〻ふすゝ契りにて
えふみの錦木千束もはや満ちぬ
その錦木も戸ざしの門を
たゝに行きて細布の織れる
あたりをやみえんあはれとぞ
つらさをもみちぬるきこゆる
錦木千束を事なかりせ
をろかなる錦木のこゝろ
め嫌ひやるきのわらはべ
この言の葉とめてこそ葉の程
陸奥も筆にまかせてこそ
こよひ味けなくもとゝしらはし
本蔵、細布のおりくさめ
の錦機よりもさまざまの花
かけたりやくわさ海をや
おもひをかさねて見えそ萎くるお
さあかりし所も細布と書き
書くもいつくる河ぞ文
の駒の織と続ける

小謡

八百とせあまりも教なくぬすみ
とぬすまれたりしもの
漢王のそしりも耳に
のちの世ぞひそかにや種の世の煙

の、やうに[illegible]

[illegible]

[illegible]あかつき[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よはる僧も　今かえしは
それのみ中しかりし数りなけれ
唐帝の玄宗も皆さん今のさかめ
いよいよ和歌と和するみつから舞
のわさらや祝よくらみて秋の宮。
あはれなとたえわたしの風流を
嵐になる人うかうたり　今の雲
さやひの花と見れなかくて
お見せとさひの数しるおもうよ
又なきたえむしとて来くもや
おくれまんかのきれするとや
まさしくもれしかしよめてきも

明月の秋のかりぞらも皆このまよれ
てるれ恵いもやし汲動されハ
君かと見れかへしとやはら君へん
君と見かりや所てしとらく世おれ
逢手あかりけれい雲中立あるや
月よ三千里ならの都の世よ。
そやかきりのれつひへいかの宮お
そとさくひくまう浅なお　浅もよ
しや宴会の今かれかる中なると
桜よ並流れも　和しかりしも
舟車のやうやうへてまひらめとい
名月のひとく　酒宴あそふ

て呉竹の一よとこ澄る月影に
風寒よし冬ふかし氷映わ[illegible]
ある塩の音と[illegible]とも覚えとあ
ともかくもこのともう[illegible]
見とのとこかれ悪それ[illegible]君
さまねくひまよさらまずくもわぬ
ひゃうく嬉しさとほまは
ん屈衣ゆきこれ程打わ流いと
海や[illegible]くれもいさある露よゆ
まと打寄るとそこの汲をく
とふ[illegible]の[illegible]仲[illegible]とそ
[illegible]

虫

花よ鶯花とあんじれ伴つらく[illegible]
夕されば[illegible]一時よ[illegible]
[illegible]花[illegible]
ん風月の友よそのかれし妻ある
鳥や秋の野に草葉かれとて虫
ともぎけしんのなかうちとや一[illegible]
の[illegible]やとりも化生れ[illegible]と[illegible]
[illegible]かれ[illegible]てあるを[illegible]
[illegible]の深[illegible]下の[illegible]
[illegible]ともよいとつき流[illegible]
の[illegible]されるへ[illegible]

ぶれしも庭山の森にまはりまつよ
のぞれかへりもめどもゆくりもつひぞせ
とわさうしぬるひれ糸の花あなたへ
まれともしれとちやさつ空かよ花た
へのおもひけんさ見えんなを天への数
く秋花れ錦まるふしくよあまなく
廣き天とちや今は淵せ代今日を
にはとふ見えぬ秋まくなもさくしやや
菊をも千代業の世へに雨降まさ
らも秋ひとりさめもさく雨まを
おほ葉まつ嶋さもれむも禄よ
ぶと錦織なつしく群れあへしわ

そもそん さうさの ゐまとあらそと
先の種を前に鳥が種まもとく出
の禄乃 儀とるるわ さうらさ
ほちゆうく浮さりなせて繼辞ひ
らしるこの笑み声中に浮て
秋栄の実をれは夢まんまんく里
んとしくあるあなあへくさり
とやみよへ乃隠もぬこのおさ
海中も新ねへ上浮しともよ春へ名
おの種をまめくおなみれかの花
見ししひに毎して業をうりくさる
鶴乃京れは業まもうりくる鶴乃京

世のまゝやあさかほの世のまゝや
のこかしん

渡舟

世の数にもわらぬ身のむくひし世
とやかくを云ひ此人は昔の友人
人あまた住みかへるたくひ入かう
死しては済旅かはるたねのゆかりあ
心にあひし名からう人もか
つくしの渡しわうてあかと
えとうみひしよるわひさる元
世の人ありかめし元むしとろ
決しも皆ての其むかし也
孫に見せしれとうぬ今ましれいと西
かれ雪の人ぬ日入しよてか今見ん
しつおもてもいと不便なりし
葉るれやせにまを梅も山住の心て
うかりしぬ徒の今まて見る
月ことの行をなみれ氷の面
思ひかつ永らへしもあしかれ
けの氷やとかく程まゝやすと
あらむもわさうぬれ此りうな
方入去宗まくとね徒ある夢ひえ
昨日はうかわとゑしふも渡の船やま
きり入せよ御入ひ流し世になか

くもかゝもやとほしまゐらせたれ
こて疑ひなわたらく来なりけり
今もまた世をうぢ山の名も高く
うつるも遠きあはれの[illegible]
家をおしなべてとりどり[illegible]
不乱の事にもおろかならず
よる今きこゆる浮舟の法の力か[illegible]
ひうわざまゝや平らかに[illegible]
舟のよるべもまたたくる世の[illegible]
名のれ乃とき[illegible]は世になくとも
らむとむ[illegible]ひとつひとへに
[illegible]

風もそよぐ川波わらはべまで
おとこ男かきつらね[illegible]
とかくひらけもまよひ[illegible]
わざさきさのふもかく[illegible]
きしえも流れまたや　わざまたや
くら橋の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ぐ此の海より横川の僧都に見
つけられて小野に伴はれ加持
して物乃気はさりしも憂の世になぐ
あしき名残ひとへに横川乃杉代ふかき
事たる愛よ我道乃名しおひ今は仏登
もかれしなかの上弟ひちまれと也
ひよ愛ひ代ますれ枕合ふれたく於来
れ生きられし見しひかる愛し明
立横川はいかし愛し明立横川の杉
のおとしやおわりん

玉葛

長谷の観世音げにたのもしき
さりしころ此にて此本の杉
雲井代おそよやしとひゆめ乃住
昔のう此乃ころさくそしも年して
玉三瀬身也　枕志かりゆへの
わしき破風ありて使とあれ
はなや弟れのりとふれし松浦
ぐ庵船也そひしよそれたる秋
へたう九しまも漕ぐあれくも
ゆくやゆくやゆりと思はよひて
九の瀬もと見えひよさる方を
しかして船乃うらとても桜出ぬ
此うら船のしもやうきめもわかれ

くかみすしへ給ひてうわきもな
らぬ身の程を思ひつけてえゆきさ
あやしや見し人のなれ衣や唐衣も
はるなるが流るゝ衣のそでつゝ
年も唐衣打つゝ袖か流山麓
との待乃余所よのこと思ひ絶めて
古代今は三度やさかの松乃千年を
我身をさふる法のみと流めるゝけれ
無漏も同しき夢法の衣乃花
うつゝも五逆罪をてしも盛やも
実相凡世の物語さけを流すとも
是はよそれる水の浪のあわへ

見し花の思ひそめよ袖流川水も知
や流れしぬ恨よひかる人とも
嘆かれしそよ法の人筆ひ無報こ
それは法の後の世の名とかゝるも
中とと服よみかく　無八五蓋乃
遠其乃乱まよひれるゝや翁と
八葉国ゆめかけ醍さしも因の
光く大慈大悲の誓ひは三世の折
わきまへれ給ひけりやもみへて
念仏さる見それ給ひて五蓋のは
そもさ生死のちさ輪ん夢も法の報
あわれんとのべひかる一筋のみ光の分

て玉鬘乃乱れし乃恥かしや涙も
くし涙くもりし鏡や面影もし面
影の袖やかゝる恋の身に添ひ
らせく桃ひのあかぬ恨みや
黒髪のわかぬや乱乃様され
髪恨りてゆく思ひの玉鬘
妄執雲霧の迷ひもなしや
うかりける人を初瀬の山颪よ
しく落て露も涙も散く秋
のえ身も色深くうしめや
枕も念も無世をも恨み念も無世
とも思ひ出す思ひ出の夢ハ
の花や散るとも惜しき名の立し也織
梅のみや夜哉もとの花色の立
ける水の思ひよしある哉ところ
面やまよりの有る由と見るをつて
ぬれ袖の乱るとつる露もおしかな
くしやといひ妄執をひるかへす心は
真如の玉かつらの夢の玉かつら
かれ夢ぞさめにける

源氏供養

実の数かゝぬ憂き身をけ
て石山に籠りつゝ願ひの代
御経を書写しまつりされども供養

書きをきし紫式部が若紀の

雲とされけるし　今宵（こよひ）の燈火よ

向ひて心中の詞を述ばかりて、ひと

ゝきばかりの眠りさへなきとお

抑〻光源氏の御事、[illegible]

桐壺の夕の煙とくやに法性

の空に至りて、帚木の夜のその

言の葉は、終に覚樹の花散りぬ。空蝉

のむなしき此世をいとひて、夕顔の

露の命を観じ、若紫の雲のむ

かへ、末摘花の台に座せば、紅葉

の賀の秋の落葉もよしやたゞ

適（たまたま）仏意にあひながら、榊葉のさして

往生を願ふべし。花散里に住むとて

も、愛別離苦の理りまぬかれがたき

なり。たゞすべからくは生死流浪の

須磨の浦を離れて、四智円明の明石

の浦よ、澪標いつまでもあ

んじて、蓬生の露かゝる世に[illegible]

と乳[illegible]風乃あくとも葉

[illegible]のなかに[illegible]

の風[illegible]して薄雲の[illegible]

上品蓮台よ心をかけて[illegible]

七宝荘厳の真木柱乃もとに[illegible]

ん袖猶の月はうつる秋の露のうへ
まよはぬ露わけなば毒のうけるらん
様の光へのかれぬと給ふは備理の旅
よそわり来ぬもうち流るる住ひと苦き
の心よとあるく苦のうきへと浮私
れ身らまほしうやきも語給の真か
多く喜花は情と打流りも見え朱主
とらせまし蔵苑やあら縁の深き穂
玄猿渡とありもて笑識る路の
世と明けはてと緑元は跡打あらし
く回向も流は流りぬ実面住や
常へのおう今へと鶯のしるし
見えと復るか　光源氏花あらと東よ
流の力もてく秋も浮まん道の恋乃
来れ紀ともや　実やあれは旅乃光
気山に紀もあし　様の森備青秋
何事かわかるぬ宝かの浮世や
能くわと業を浮よ世界とやん
彼ん山の秋世事ありれひ世よ那達
て浮深氏花の流光も世への多の
世と下よ氣まん泣の便宜事から元
其ひられ世への義の浮情も寿乃
皆れ云義ありく

桂川

落花れよあまてゝし川樹みとり
よ風をそむしむ花ひしきさく錦よ織
さりびぬめゝてゝ驚れとし　両山
や覚ねてようの時は来く名も白
つきる桜川の一樹のかげに一河の流れ
ぐそる名をもあらしきされわが
も桜子の是又他生の縁なるべし
実や年をふる花の鏡となる水
ちりかゝるをやくもるといふらん
散りぬまで程は春なる花と
思ひ言ふ身も拙なかりける秋も遠る
と花のことし見てもちら〻花はしい
桜よりうかれ〻りぬる花なれ　花
ても衣のおそれと言をたてゝの
あまのゝぢぶゝしも今ぶゝてね
くぬの空らひしゝらぬ花真花
ゆくわし家まそらみ花やとれ
すもまれて㔟をわされゝ露を
浮しめるへまりさはゆくをも
花よのゝまるゝとぞひもる
見し桜川の水をうけて花俤
のかとえられぬる花をおそれかな
きゝと水を花をよそゝ流
なを花乃あゝゝげまくも承

きうしやまとしもとの花さくや姫

の御神木の花なれば風もよそ

ふけるもきよき千とせと枝を

ことしもこそ千世をうつして花

あるへのおもかげとめぐる桜川よみさ

よるへおほ桜のつらどおるそう

らくなる花もう風もうつら

またはうきさそふへそさなき

ろけくのとかめへなる

ある御の名桜戸乃まれある

桜や雲とうちよの

ならしの竹よ散つなの花

まそらめしぞ見やうらまし

又る桜はよそもまつやいつま

もゆ桝の花も桜もさらとも

とあつれどもひのめもら代

ぢハおもの花桜も秋暮る桜のそ

みつ花くいろやく植今こ

とのたけぞめしきやみもつ

ゑ乃今んや今を後も見

きやをぬむの沢くくとのかゝ

彼乃あるうゝん何や今へ

むひ花親の花ちきりくらもをぬ

桜のよ風流せよや桜子とも

[illegible]いつき[illegible]

[illegible]三世[illegible]て[illegible]

も[illegible]親と子の[illegible]

とも[illegible]し[illegible]

[illegible]の花の[illegible]

の[illegible]

それ[illegible]

[illegible]

の[illegible]とよりの二世安楽の[illegible]

[illegible]

〽[illegible]

〽[illegible]

[illegible]の風の[illegible]

電光石火のうちに生死の[illegible]

[illegible]

[illegible]の夢と[illegible]

の[illegible]子の今は[illegible]

[illegible]の[illegible]

〽[illegible]

[illegible]

[illegible]

男[illegible]流[illegible]して[illegible]の[illegible]

晴[illegible]雲の[illegible]の月[illegible]

[illegible]の[illegible]

さみも歎きて妖怪のさわがれ
むもや世ぬるを出でし五濁の世
く生死の海にしづみしを
仏生れし身をうけんとげにおもむきて
とも命のある三日四之三十九の
りきされたるはしめれる法あるも
三界唯一心心外無別法心仏及衆
生是三無差別なるよ歎へ
のあきや快楽の法性常住の
浄土のあらへ錦の金の流るゝ
池の蓮れんとかをかをる
くやしくいしかれしばしかりて
しけ弁金の塔よりおへし悟の
ひときむなる道へ救済の生れ海
くだけしのぶるれや宝の池のみ
功徳池の流れは衆生救しの来
うてかもえめくのきしのひを往来
まうかれ紅の仏なる身をや泳
未御十方の世界あるを我
おやまりなるを命の鐘うつ経を
八万の功徳をそなへ雲の上に遊ひく
愛やるの者はまよいもつべこう
浄土の衆生とかへ見え浄土の寺
也しも悟名を嫌ふの者も眼ざけ

て灯の光えと作くるや笛
女海氣ふ浮為称ひ志げへ乃や
今ハ何をかつゝむへき是にも限
花おとひ身のもとらし淡つれて
〽風子そとさけて修りれ公羽
夏とも針花ひよのいつまてさそく
とかくさまとまれそれ作かぎ
たへかる我ハ思藻の〽久しきを
わかぬ細とかまれ母れ浪もう
つかれ〽強人とめ裏とおき
なくひよおあされろみかみし能く見
道しぜれしやかたは出なか
暮木のみとうたてあしぬとる
空しおとみハ己や歎ひもかるを
思やみかん遠そそれしろ望あ
そられしりけま

百萬

〽牛羊径途に通り烏雀橋の梁
に集ふ実に世の中ハおもき波乃立
ひらく雲水の身なりとくいく人の
もの種乃家の衣よ〽引後得
と通りしはさし色に世と無し
中の教乃末乃花ろく法ひもと
めぐれとも夏れ私なみあまとめて

て　皆月の花紅葉の表にも
見えぬはかりかゝる憂世の中
梢の一葉もよそにて見るも紅人
人ぞ見えぬ秋の波も霞の上に
今は昔かなる年頃乃流に
月の都にも見えぬ雲の御ゆけを
よそに見えぬ浪乃ほどに見ゆ是
てならぬをも夜よりぞ方々
ねたましの露の影もわかれず
かゝの船をとゞめ廻り空に
かれ乃門をくゞり山城よ
[illegible]

つる風景を見渡しける嵐の
くて月日も送る身の年の寄るも
憂の身ぞ住むらむ檀の
とりしつる浮世を厭ひはてゝ
よその見る目も流るゝ花の深き
の亀山や雲より高き大井川
とれ多き世乃さらされや風も吹山
桜嵐の世も雲の尾上の鐘乃音
霞立そ添へけむこの寺にそ
御法き花夜も楽まる
の法そへる見えかりもちをを
嵯峨のるその離れぞしけなくも

かゝる身にや わくまうれしとも

何の中る釈迦とれの迷ひおゝだ

わきまへおるしとも思ひそ稲摩り

修りし赤栴檀のそる空やうそ祢

力を取して天人出家衣見ふ出給ふ忉利

まらりぽと雑くとはるよ取し出す

安居の説法とやハ 母摩耶夫

人乃孝養れおなさんと仏も礼母

とりかしひは今在そし説人乃音

とまくおと小母をうおしまねとぞ

と仰ゝ身をりとらんへ下りてそひ

おくる歎きはひかゝ給へる

我が意をまた遠 わゝまう子 無やや

光明きゝの中にかとや 種まれ給

きみかわゝ種子無やや家の子之

かくて南無阿弥陀仏と稱へ人の

らちを子なりもわすと浅へ念仏を

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南

無阿弥陀仏と念するも遠近か

りし西ひはわかなくひ出でし夕

暮もなりやせそおもとの移ゆる

子種とりて礼鏡をよ 今つやと

くまを若葉をひうらぶれそらそ

もうきしねをわうしめるとひ参

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]法の力ぞ
[illegible]東海の[illegible]
[illegible]

三井寺

〽[illegible]
きく　名も高砂の尾上の鐘暁行
て猶の名残ゆかりの月を[illegible]
[illegible]難波なる　名所多き鐘の
まことや[illegible]山寺の春
の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散
りけるげに惜しめどもなど夢の春と
暮れぬらんそのほか暁の[illegible]
うらみをそふる行末にも枕の鐘
ひゞくらん待宵にふけゆく鐘の声
きけばあかぬ別れの鳥は物かは
と詠ぜしも理や又月落ち烏啼いて
霜天に満ちてすさまじく江村の
いさり火もほのかに半夜の鐘の響きは
客の舟にや通ふらん[illegible]
蓬窓雨しただりて[illegible]
[illegible]

村の浮雲をやり[illegible]の標しけれ

わかれ舟もをしてやらん[illegible]

なりてやがて唐土の舟の纜を

あらしは浪風も静かなる秋の夜を

かゝる月をし三井高く待たさやけさ

わけてのほるや[illegible]めも時よ

よわる[illegible]に従ひわらへ　嬉しかる

つゝましき[illegible]のさゝえとこそは

のりうくわれ[illegible]の　[illegible]

親と子は猶ありきをやくとく

同じ舟ながらよと[illegible]しも三[illegible]ならん

ゆらき　親子の[illegible]も[illegible]のわかれ

[illegible]のみそくお様ひのみゆるとそく

[illegible]しれなれは常の[illegible]

八[illegible]の[illegible]といひよ親子の[illegible]

契りて[illegible]よ[illegible]　嬉しかる

[illegible]の[illegible]れくてはひ[illegible]の[illegible]

子[illegible]つれ[illegible]の[illegible]と

[illegible]

くもゐにかへりゆく

天鼓

実や世にことのはの数々の[illegible]

思ひ別る[illegible]の思ひの深く[illegible]人

と頼く[illegible]しひま[illegible]く

殊に人の罪深く悪道乃波よう天
生まれし世をもやすくの為ひの家
ながき世のちぎりひれ海よ沈むとや
ひとへにしは法のさうける頼まく歎
五の風長ふるや況や仏性仏種の身
生まれしまいらうへをもとむる時の生
正法のばよりら山を越るく波をよ
渡るよう勧子より見え況しく此世と思ひ
我よ見ん正法の後乃為の徒然
そまさる愛衣羽を頼ちくもさらん
の方たる世よ流し花稚も唯荒され
やもめの時乃しのぶ心も君も何

身をも頼むまじ此の時も稀なる浅
よもあらじまじよ君へく渡らへし
実しき人の心の中や勧衆
其の時も稀なり君も浅ましき
うれやまともや見の後ぞかる月に
らげさ雲霧乃ひりさと
世の隔君は最よ我の我も
我く落るかともむこまで見るや
うれし勢すこもみ嬉のに
再もま流るかる実も歎子の為
しの君も我と思く流る流
浮きうち事を為に離るさ池も天

数ら見と流れしおまへの池よれ来る
つく同しく天の数さ立て緑竹の
の色よく清きさなくて千代の松と
れ亀ひそみ鶴やなれ秋の色え
しばしや三伏の夏も涼風一葉の秋の色
夕月のかげも照らしひくく流るゝ
て清く仕しくわたる鶴の水の
ひさかた劫と少なきて天の寿まことなる
よ流らし多き人われ千歳の世を
もらし人の代よ流き治よくわれてく
水姿の世の中も深くありしれ君にも
浮かの水の中へよりしへ出る四の
えとりも流れ代の鶴さよ山も流
君か代の御上動かぬときぞ人
なりけりかゝる君ぞ名も高の上
地 君も天数ら千年なるうれしき ひ亀
地 鶴亀も千代まて久しく亀 集るなる
亀ハ天数の千年ならず齢をことぶき
鳥か帝の君も天亀の世の数なる
うすき君の方も実も天数の声
シテ 舞ハしぐさき数を行る美な
シテ 月よの舞ハ東夜やと夕月かゝる
庭の面 四方の景の緑なるを見て
シテ 月宮人の袖もやさしけれ ワキ 天香

鶴　寿も重よ　やまとより
また楽しみもおとくおかりた
のね　おかとも離れうらかき
とも契れてもふかひなきかな
かくして人の身のうへ緑竹のは
向の霞まとの一声や太こまこと時とけは
くらきふれやまうふ御意に
帰って月もしや星もわかれ
中空の鶯鶴の操れりとれは意を
定置の居てまゐらせ候
君とふけく秋まらくやとまぬ
今宵ら色里八千代
のゆうべ雲の波をわかるゝ
月よそふれはよ花の重波や
たまくへとや秋風の音もあらて
の頃の徳もまうだるゝ八千代
くと秋も尚きむ時の数かし八千代
ちまうれ春ならうそうて妻
冬いかうてう妻の為うと
いつかりよまれ

第六十番

武蔵に流る色ぞ此の紫を深
よ流命と頃の色の色えとやし
はなぬれ比恋ゆかし面影

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]浅[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

妻の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]浅[illegible]

[illegible]

上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]うつゝ[illegible]

[illegible]秋の風[illegible]

[illegible]

そのかみ素盞嗚の尊も出雲の簸の川上
にくしなだ姫をかくし給ひしかは
大蛇あらはれ来るを見給ひて
しかの程をとゞめしと名付けうち
らやぬる樺を見剱と名付く
その後代々の御代を經て天
とよあれは雲の上におはしまし
そのほとしとまゐれくとそなれて
桜ぞ天照太神として天照
とよとりもむ雲のまゐれた
尊の後々とりとある名の下
ひかきれさひやと

素盞の御剱暗の尊に捧く
その後人王景行の天皇の
やまとたけの命に勅ありて
あづまの夷や万代と民もさ
ゑく安穏よ春年来ゆるまま
国をとくしつさきぬぐ山の端を
あめがりてあの見るを奉る乃見
ゑまけや今そも見ける見からも
れかれて焉もやかとん焼火
ま一國のふよし風をも黄
駿をうかりけるれかくるや
人よく勝かしてみると陰人

のところゝかくぞぬ所捨てく我ら
乱れかしみだれ髪ぞいふれつゝ覧
んと又立帰り夜寝てそのまゝに妻の
形見かれやしがたなと見えてもこそうちね
見えずなりにけるかな

梅枝

有かたや妙なる法乃声よおかれ為
変男子乃かたちとやかゝれ袖しの
ねがひも猶弟ひの力なく
うし男乃花を梅に残りや
さんぜのほとけも我がかしもしやかみび
あれにとられしがもし無上は
よされは女人のされはかゝりも乃合本
舞女の妻の形見なりて残し鳥兜を
つねに身にそへひた着の袖をまとひ
もなき涙乃枕にもおさめ置し
思ふらしつくしむにあるにこれを
のちの世の思ひある舞の袖なれや
まことゝ成りつゝ懺悔の舞を
かれのこそしれ恥しく舞の袖
伝へ我にも伝へて舞ひたる我
せまく狭きり衣の袖の舞
ひと夜はなきけるかな実面恥かしや
さんげの舞をかなでゝ舞ひの袖

立しくはゝもあかねの[illegible]

しらかねの月もかゝやかしたりまた

まうかてん 仙ともあれ位乞をお

陸より流しまて 波ゝ山へ流

わかち渡 あれも云れほ渡ゐ

海波のあふらふ 世をと継わり

よえく 朝との柳ゝ影さへきお

くやもの鉄鹿子 うちやうへ梅

うえしめかへ 汎花 霞かぞ

下 風吹こしいつよ世の花よやよ渦雲

地 廣やうひとの 秋よ袂了

まこと花のけよまもりかな

由法はさそれいぐ 今日あれ

あるいは霧の継もを共のまもあるるを

君の楽はくこうか銀おり

鸞やあら宝ゆめを 御有

秋も桃へそとやをん月色へ香来の

世と春風ようへてゐし 鶯はけ

云れはおもうけまや游るらんく

廣和

風清ろうくせいあしもやにま

花れのいをも言也なかえし

月あみもわれを 当う

とくままひら ちまでいれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

彭祖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

されば[illegible]

[illegible]の[illegible]の盃

[illegible]

[illegible]仙家の酒[illegible]名あり

[illegible]

仙家の[illegible]寿命[illegible]

菊の酒[illegible]

ら君もめされ民さかへ[illegible]

[illegible]

[illegible]菊の盃[illegible]

いやのま[illegible]

や盃[illegible]菊[illegible]の流れの[illegible]

てう[illegible]

元の[illegible]して[illegible]

されや[illegible]の過る[illegible]

[illegible]花の[illegible]菊の[illegible]

いく[illegible]

[illegible]く薬の水を[illegible]

[illegible]菊の[illegible]

[illegible]とし[illegible]れやすれ

とひ[illegible]の[illegible]となる

きみの[illegible]花[illegible]

ひ[illegible]楽[illegible]いつまで[illegible]

[illegible]

いそし[illegible]の月[illegible]

[illegible]雲の[illegible]

[illegible]も[illegible]

[illegible]文[illegible]

よ[illegible]盃を

[illegible]菊の[illegible]

[illegible]も[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]千年の[illegible]つきせ

[illegible]

[illegible]

三輪

[illegible]

かうしの大なるに[illegible]の

昔の[illegible]代をあらはし[illegible]ぬ

[illegible]まされと申[illegible]

[illegible]とおもふ[illegible]のひとつを

[illegible]年月[illegible]

らるゝ君の[illegible]しまれける

[illegible]ひるねは[illegible]と不[illegible]

[illegible]

こひ[illegible]

けふも[illegible]のまつてそこや

[illegible]今[illegible]

ともしよひかりと[illegible]

さきとう[illegible]の[illegible]

人ごとく[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の力よ[illegible]

ゆく程よ[illegible]の神垣や杉の下枝

[illegible]

[illegible]の[illegible]その[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]をかくさめん　[illegible]

[illegible]神と[illegible]

神[illegible]のめぐみある[illegible]

ちはやぶる天の[illegible]

なく[illegible]やこの[illegible]

八百萬の神[illegible]

[illegible]神[illegible]奏しつく[illegible]

[illegible]神[illegible]

[illegible]出て[illegible]晴れて日月光[illegible]

なりけ[illegible]の面白[illegible]舞

しろ[illegible]と神の[illegible]

かくの[illegible]

[illegible]供物と三種の神[illegible]

の[illegible]今[illegible]

[illegible]とわけても難き[illegible]の[illegible]

さらば名残[illegible]や名残[illegible]

らん

龍田

それ[illegible]山より天地[illegible]

まる代のめぐみ民安全[illegible]

ひとり龍田の神の秋の[illegible]

その[illegible]秋の[illegible]かかる[illegible]

年[illegible]かかる龍田[illegible]湊

や秋の[illegible]かるも錦[illegible]海

道も渡[illegible]紅葉の[illegible]秋の[illegible]

名にも吉野の山風と[illegible]

[illegible]世しの[illegible]

[illegible]吉野の山の[illegible]

桜とも[illegible]

吉野の桜[illegible]

[illegible]

流[illegible]なり[illegible]

花や[illegible]吉野の川の[illegible]

[illegible]光[illegible]

月も花も吉野の[illegible]

[illegible]

[illegible]

流るゝも紅葉[illegible]

しかのみならず[illegible]

紅葉[illegible]

[illegible]月も[illegible]

[illegible]

[illegible]月も[illegible]

[illegible]紅葉の[illegible]

紅葉の錦[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]紅葉も錦と[illegible]

[illegible]山の[illegible]

[illegible]

自然居士

[illegible]

[illegible]

黄帝の臣下に貨狄といへる士卒

あり貨狄庭上の池の面を見渡せ

ば折節秋の末なるに寒き嵐に散る柳

の一葉の水に浮かみしに蜘蛛と

いふ虫も虚空より落ちけるが一葉

の上に乗りつゝ次第しだいに[illegible]

[illegible]の気色に吹く風に[illegible]

[illegible]貨狄これを見て蜘蛛の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]舟の徳[illegible]

[illegible]

と名付[illegible]

[illegible]

龍頭鷁首[illegible]

[illegible]

[illegible]

ワキ [illegible]

詞 [illegible]

上 [illegible]

同上 [illegible]

花月

百三

頃しも安政[illegible]の[illegible]九十[illegible]夜

の[illegible]くまなく十三夜秋の月

[illegible]酒の[illegible]に[illegible]流し[illegible]

上野[illegible]大[illegible]の[illegible]

[illegible]も[illegible]山[illegible]の[illegible]

の[illegible]酒[illegible]も[illegible]

れと[illegible]の

[illegible]て[illegible]

しめ山に[illegible]

[illegible]の[illegible]

れ[illegible]柳の[illegible]

よ[illegible]

[illegible]柳[illegible]

[illegible]

[illegible]と世[illegible]

[illegible]柳[illegible]

[illegible]

[illegible]枯[illegible]

[illegible]今の世と[illegible]

と[illegible]の

[illegible]の年[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]山[illegible]

[illegible]松山[illegible]
の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
ひの[illegible]
ひの[illegible]
大嶽よ[illegible]
の[illegible]
乃[illegible]
[illegible]やるまれ[illegible]
のけ[illegible]
[illegible]
しぺ[illegible]
[illegible]
く[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の[illegible]

東岩香士

昔し西像[illegible]末法
よ[illegible]けり[illegible]
秋来[illegible]とも[illegible]み[illegible]
の[illegible]見[illegible]も[illegible]

て[illegible]

古[illegible]

んぬくら[illegible]

落あまた[illegible]

（ワキ）沖の[illegible]

世に[illegible]（シテ）面白や春吹風もさら／＼として。

波の音まても[illegible]（ワキ）[illegible]

[illegible]の（シテ）[illegible]

[illegible]風の[illegible]（ワキ）[illegible]

の人（シテ）[illegible]

[illegible]

[illegible]

百千鳥（タダ）百千鳥さへつる春ハ物毎に

[illegible]わ[illegible]も桜も[illegible]

（シテ）[illegible]の鶯[illegible]

（シテ）[illegible]東岸[illegible]西岸[illegible]

波ハ（シテ）[illegible]打波ハ[illegible]

[illegible]極楽の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

（シテ）[illegible]の[illegible]

緑と[illegible]や水と[illegible]。

萬法[illegible]

放下僧

殺仏殺祖の神機とききしも殺
祖と見えしかど今此の[illegible]は
あるのなく[illegible]御わたしあひ
かし　されは[illegible]も法[illegible]
[illegible]ぞわらし御身より[illegible]く
[illegible]なる。てんしてさわぐ[illegible]
[illegible]の[illegible]のいま[illegible]
[illegible]くひとつの[illegible]
[illegible]のわたれの[illegible]
とりまるの[illegible]
どもれ[illegible]の[illegible]
そらく[illegible]の国[illegible]
かさねの雲は[illegible]ひねるを
しるべとても[illegible]月も山のはをゆ
ひと声もひわり雲井の[illegible]
行舟八重[illegible]
大それど[illegible]
夕陽の[illegible]
かの[illegible]言ふ[illegible]
ここ[illegible]まや　風よ海の白[illegible]雲の
とむや[illegible]の。
花の都や筆にかくとも及ばし。
ひがしに祇園清水落くる滝の。

とゝの嵐も浪立の[illegible]もなく。
西に[illegible]の流るゝ[illegible]
[illegible]水車山の[illegible]の[illegible]の川流れ
御[illegible]梅か枝に[illegible]行
よ[illegible]の[illegible]風より[illegible]
[illegible]の年[illegible]海より[illegible]美麗[illegible]
[illegible]
あら[illegible]下の[illegible]との。
[illegible]の[illegible]て[illegible]
治世の代か[illegible]まつかくて[illegible]。
おさまり[illegible]みよの[illegible]代を[illegible]の
けふの[illegible]

よろこび[illegible]かくて[illegible]
[illegible]のくさ[illegible]の[illegible]くれたる[illegible]よ。
親の教[illegible]も[illegible]
[illegible]末代[illegible]

山姥

洞[illegible]の[illegible]よひく山
[illegible]の[illegible]
[illegible]岩も[illegible]
[illegible]山[illegible]の[illegible]。
山[illegible]して[illegible]岩[illegible]
[illegible]天海の[illegible]
月[illegible]の光[illegible]

らく風ハ来れハ夢を破るまておち
こちのたつきもしらぬ山中におぼつ
かなくもよふことりの声すごきおりく
伐木丁々として山さらに幽なり。
法性峯そびえてハ上求菩提をあ
らはし無明谷ふかきよそほひハ下化衆
生を表して金輪際におよへり
山姥ハ生所もしらず宿もなし
たゞ雲水を便りにて至らぬ山の奥も
なし然れバ人間にあらずとて
隔つる雲の身をかへ仮に自性を変
化し一念化生の鬼女となつて。
目前に来れども邪正一如と見る時ハ
色即是空そのまゝに仏法あれハ。
世法あり煩悩あれハ菩提あり仏
あれハ衆生あり衆生あれハ山姥も
あり柳ハ緑花ハ紅の色さて人
間にあそぶ事或時ハ山賤の樵路
に通ふ花の蔭休む重荷に肩をか
し月もろともに山を出里まで送る
折もあり又或時ハ織姫の五百機たつ
窓に入て枝の鶯糸くる紡績の
宿に身をおき人を助くる業をのミ賤
かめにみえぬ鬼とや人乃いふらん

世を空蝉の唐衣はらはぬ袖に置
霜は夜寒の月に埋れ打すさ
む人の絶間にも千声萬声の砧
に声のしでうつは唯山姥が業なれ
や都に帰りて世語にせさせ給へと
思ふはなほも妄執か唯打捨よ何
事もよし足引の山姥が山めぐりを
するぞくるしき　同　足引の　山めぐり
一樹の陰一河の流れ皆是他生の
縁ぞかしましてや我名を夕月の
浮世をめぐる一節も狂言綺語の道
すぐに讃仏乗の因ぞかしあら御名残
おしや暇申て帰る山の春は梢に
咲かと待し花を尋ねて山めぐり
秋はさやけき影を尋ねて月見る
方にと山めぐり　冬は冴行時
雨の雲の雪をさそひて山め
ぐりめぐりめぐりて輪廻を離れぬ
妄執の雲の塵つもつて山姥と
なれる鬼女が有様見るや見るやと
峯にかけり谷にひゞきて今まで爰に
有と見えしが山又山に
山めぐり山又山に山めぐりして
行方も知ずなりにけり

當麻

されば貞女の中将姫は此山に籠り給
ひつゝ称讃浄土経毎日読誦し給
ひしが心中に誓ひ給ふやう
願はくは生身の弥陀来迎あつて
我に拝まれおはしませと一心不乱
に観念し給へば祈りし年も程を
ねらしく比丘尼を初として
て當に念仏三昧の道に参給へ
山陰の雲吹風も涼しくさえかへり
夜も更行水の音も澄て毎
ことに貴くもとり称名観念の
声の上坐禅の窓月の寂寞て
とおもはれ給ふに人ありと見る気色
やありても あやしき人や
んと待給ひしに程立
て立寄りて誰と問へば
来りたれと仰せけり中将姫は
われまつて枕を流ど呼ばれける
深きもしらぬ山中に
て阿弥陀仏のなりて
又化尼もあらはれ給ひ
よそ物名を来
まうとして

しく正月の[illegible]の

時雨のしく國波許よ[illegible]しらぎるは

の流[illegible]も[illegible]

さ九月[illegible]の[illegible]

つけくおとるや月と霜し也二月

[illegible]の月ゆく[illegible]も[illegible]の時雨[illegible]

法のとうさんめ今[illegible]

法華のゐよ[illegible]とそのやりの[illegible]

[illegible]今[illegible]とらつむ[illegible]を[illegible]

のたのの[illegible]乃　[illegible]中よ[illegible]しさ

まうと[illegible]もて[illegible]まさて。

[illegible]月に[illegible]してみらく[illegible]

[illegible]もあり[illegible]しや[illegible]

かゝの[illegible]嶽と[illegible]

[illegible]と[illegible]との[illegible]

しかる[illegible]乃嶽と[illegible]

の坂との[illegible]

なり[illegible]よ[illegible]

[illegible]中ね[illegible]。

も[illegible]

と[illegible]

[illegible]

[illegible]

し[illegible]

今まで申しつる[illegible]

[illegible]なり[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]己身[illegible]

[illegible]虚空の[illegible]

[illegible]遊ひ[illegible]法輪の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]来法の[illegible]

[illegible]也と[illegible]を

唯[illegible]

[illegible]一切世[illegible]

（ワキ上）[illegible]

[illegible]

（シテ）[illegible]

（シテ）[illegible]

[illegible]

[illegible]清浄の[illegible]

[illegible]

[illegible]法[illegible]

[illegible]光明遍照十方の衆生を[illegible]

あはれは[illegible]流法の[illegible]

[illegible]法の[illegible]

の[illegible]

[illegible]

ひはりの[illegible]

[illegible]

[illegible]

と[illegible]

流代の[illegible]

[illegible]十月の[illegible]

[illegible]の葉の[illegible]

よ[illegible]

もとくも[illegible]法の声

きこえ[illegible]代となりける [illegible]

山姥の[illegible] 又[illegible]

仏とも云 仏とも云 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の[illegible]

[illegible]

[illegible]の山の[illegible]山[illegible]

[illegible]

の悉毎くはそれらまま。

けれては龍女よゐくれ代そ

いそを有つきせや消きせし。

悪よひあゐ乃ともひ皆死かど

もあそわ流はのれなかれと彼乃

喜とくも[illegible]れ代なれやまぬ死代

かれや分寺の佐よ万ねを字業

のこらよくりかえん

海云

[illegible]凡摂なしふ本なしさともえ金る

のぞしみて日尚義死の道乃財経之

しの皆ともまよ[illegible]まもと

人多わしみ雑の凡経をおし

凡経よひれんく逆乃達[illegible]金

沙竭羅龍王の八歳の龍女か[illegible]

娑婆世界よ出で宝持し捧ぐとも

へ深達罪福相遍照於十方

微妙淨法身具相三十二以八十種

好用莊嚴法身天人所戴仰

龍神咸恭敬わしみての凡経や

かく今此経の深旨のみゆくくを[illegible]

八部人をも皆見聞知せしむ

さて我仏の志深きことほどしらず

是八講の會の勤は仏法の[illegible]

具ひとひもひたるきれとけりなう

融

ワキ上 磯枕苔の衣をかたしきて岩
根の床によもすがらなほも奇特を見るやと
ゆめまちがほの旅ねかな

シテ 忘れて年を經しものを又古へにかへる
波のみつ塩竈の浦人の今宵の
月を陸奥のちかの浦わも遠き
世にその名をのこすまうちぎみの
融の大臣とは我事也我塩竈の浦に
心をよせあの籬が島の松蔭に明月
に舟をうかめ月宮殿の白衣の袂

三五夜中の新月の色ちへふるや
雪を廻らす雲の袖さすや桂
の枝々に光を花とちらす粧
地上 爰にも名に立白河の浪のあら面白や
曲水の盃うけたりうけたり遊舞
の袖 ロギ上 あら面白の遊楽や
そも名月のその中にまだ初月の宵
々に影も姿もすくなきは
いかなる謂なるらん それは西岫に入日の
いまだ近ければその影にかくさるゝ
月のある夜は星のうすきが如く也
地上 青陽の春のはじめには霞む夕の

金山　袋のもと三日月の影をそれ
もゑとう又れ中し徒魚わき
深らりと数ひや雲上の題名に
引れの座とも家々輪をこそれ
数れものかしと名も地道の本
よ高し奥花月下の波よ重と
峰ともわし秋の夜白見
種も少して月ととて氣ろ
今くぬろの雲と南とな風
老添よさそうれ月影よ八重
よそひわ座う出九置
けや名所とよの面白け

猩々

上
老んやれ紅の道すがら菊をれ
流ての袖もとりし月の出てもあま
つやめふくるまつき乃かまとて
へて綺ぬらく　サカリ入コ　中上ハ入　を萎かく
薬の名をもきくの水さかつきもう
かみ出てともにあふそうれしき
このともにあふそうれしき
秋風のふけともふけとも
さらに身にはさむからしと
ことわりや白菊のことわりや白きくの
きせ綿をあたゝめて酒をいさやくま

まふよはれ人を誘ひ出らん
月望わくまもあしすゝめらん
やの頭ちらの浦のり催し
霧よ気ふよ薫れ氣乃笛手
さ波のたちことゝもらら忍を
こよひ浦風寒秋の空へやの
こゑん森ゑてやれ乎らうとか
とかれはうびつやい泉もこ庭
今なしさらる心もつれつく
君代まそ乃行ののこれさけ心あとも
つきとのあたらね縁よゐさう
我もふくへはよしふわれさ
あくとよ声りよしる残の髪さひ
御と真えとらとるそのまつれ笑
為とこりあくく盛れ

善栄

又十二因縁より二十五の有のちまた
ひ出て六道にめぐりて生死に流
轉よ四生の事しの数をさく
誰か又自他のへん妄近の家は
く火車に業火の焔を起して
かんなくの三の途にぞ沈みぬ
爰をもつて又生死に流轉
して今要に生れ八の苦

それ善悪因果はまことにかんなん
よせつのゆうさいのえんに入車輪
のごとし我人生死にきするを種と
害もせず生死苦しみの海に浮
沈こそす法の舟橋を渡ることせ
ねぞ悲しき地獄の[illegible]とい
ひかうぶつは仏法繁ふの時なりし今の
法も盛んなり地獄天もまたなし
御法とぞせんこよみわかり如月の
上つかたなる男女ら末世の法会
佛菩薩天子の深き慈悲の深さに
て下し随喜の淨土極楽
も来たのしや富へ其深の恵み
をたえ傳説の厨子也や三寶の
納め給ひ此大悲をとなへ給ふて彼ん
その尊く覚えざりき也をひらくの
猿楽舞能わん余名れば来さま
ても我先を照して深くそれ楽
節々ら高乃麦橋のかれて天下泰平
やさぶらはん（ワキ）其年九月上旬日本国へ。
高橋乃家に傳る重代の太刀善
扇まで其ゆう宝として父祖万葉乃祀
俵藤太の龍の縁も過る屋[illegible]
俗豆乃三寶の作風も吹流へ三世

百廿ノ一

の旅衣[illegible]

[illegible]の時至りて[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の代より[illegible]の代まで

[illegible]の[illegible]

[illegible]に隠れ[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]代の[illegible]

[illegible]

より[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三熊の[illegible]

都より[illegible]

て[illegible]

巻衣

これも[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

して[illegible]

て[illegible]の[illegible]

[illegible]

そもかんおんの垂迹ならひ見ては
てしるやん月廣きに書さ
ありけ衆生を憐むれたる大慈会
とくとさきう天を道はまくれ
とき道しやうらわうめゆ
いちうさん経にんのとみきこと
やさまれて天竺の修羅の傳へ
の基をうつれは三輪の山
みのれりとらさりうへ生くらむ
とりひとる流おあれて派遣おれ
うもし天よ継うしそのひあって
玉津嶋のとおもひかさとれひ
ゑばれをきてとわりかゝ自和哥
やくもたつ出雲八重垣
るそれのさしれ数乃まあいはと
とも流る水のつへし神の吉田の
神の風にもさそはるるされ
うしのつゑ弟しられしも作者
さしもしれ山へ 衛上寿経
作者出三郎事つくのちて
ちう世への書給ひ代ほとる者
ひとり今太宰帥也 されたる
まさるらんが中のまて 此ゐ
世阿弥へ書きくへ えれん

乗とぢうるや 同上 守きやのつと
人と云ひくのさもわしなる
ひきやせして 御そうちるとぞか
そうまれ 佛陀の涅槃ねは
来マテ十遍王みちひき 遊とわれ
同上 むコラハ中のぼんせんし「薬師如来
同上 くもりとなく 二世安楽
同上 いちまん文殊 三世の覚母たり十
万善 普賢さん仏 同上 とく
の佛しばん会見まつりもしろ流れ
弥陀如来とそれくぞえふきのが
光やして此世よりうちとぎこ
祖ようどぞくけへ念仏
とつくごれまくうりや神にわ
うきせおそとひとうるあゝらよ
正念ひさよそ又不惟まそ呼よ
おぼ

志賀

シテ 敷島の道ハ昔の時より今に絶えせぬ
さんすして当今の臣下なり
ひ 同上 二恐ろ歌仙也とくを
ゐのへし志賀の道の花のもとかえ
ごりばよ森の木の葉の露の
れそしひおくのふは花よ吹くや
寛仁の人の心をよそさとの

情ともや難波にはあさか山の紀
見えし山の井乃浅くは絶りそく
さの露も宿るさうれやこゝろ
乃ちあめより教おほさるれの心
の花乃まゐるとも妙なりや萬鶴の
たゆる代のもおきひ絶きし三
すまし神も[illegible]こそ凡まひて坐
見れおのか朝も威徳あれまへし[illegible]
も金よ我朝時をいへのとをもいへ
唐漢の書乃[illegible]詩のかれも
和の朝の言葉のひろまるを
り今上九乃代や[illegible]
ま
然乃や[illegible]く海乃日の本[illegible]見え[illegible]
西より風靜[illegible]玉乃林葉の也[illegible]
荒しの山[illegible]れちの[illegible]にも言
色[illegible]乃御[illegible]てや天地をもと
く鬼神を感とおもしとや[illegible]
を楽[illegible]賤の心[illegible]の[illegible]
ん家[illegible]ひ[illegible]今[illegible]さうて
むかしを立大伴の黒主と申して
うば代とくして山乃神と尊ん
それ山の神そとかくるや梅は大伴
の世に立[illegible]家の大伴の[illegible]
あらはれ出てわりあって[illegible]の

花の袂を翻しつゝ舞ひしやさと
夕ばへの雲に隠れし其の志の雲路に
帰りけり　思ひ出るも恋しき
見しは幻か夢かうつゝのあ
花の陰に映しもわれの原の
殿上にまかる舞楽の形こそあ
舞ふ人も宮も殿上の
おさへ雲も恋のうちの月も
くも月も花の雲の星も見ゆる
の深き思ひの雲にまさる影
の思ひのなげけさようこそ見え
くそしらぬ後の山　本地のあは
老の身は　其の後老の身にも忘れの
李夫人　袖のゆふけまくもわかきか
しやけれの葉　わりさりなの
たぐひあるの雲の衣目もあるを忘れ
らなさよ　我はみは君が代の名残
ちよ雲の花の姿は残しけるもあ
をよびなきもむなしき　我もし雲
の風もそふなみの露
の夜のへんみて　花は木末に
しれて　雲の姿の雲の舞　無るらん
海や接る雲の山の迷ひ去れ
さりわれ花の雲の袖の経さへ

しほれの袖れてしよう路ぞ
拾へて行く〳〵宛面見えずなりゆく

関寺小町

寔や思ひつゝねればや人の見えつらん
と傳へしも今は古へになりける
年月ぞうつり来て衰状の老涯
来て若の髪も変し雲の鬢もれ
うつ命もとくよりうとかつて惟
槿花一日の栄に同じ去ればいかなる
此秋ぞ今世中の義やまぢの月と
うけんと綴りしとも秘かなる。
あまり花さへしも露ほどにても
おりける雲の命かゝるぞ無の
昔や思ひし此古の身やとこそひし時
これもまたとよみし我も世中の
今ちかめの花も色見えて古へ
玉殿とありし君王も翡翠金
きり渡よ金銀と掛戸よりは水晶を
つ翡翠の蝉鬢は粧ひの衣も
誓りく花の粧ひつくりにしの闇
かく今の翡翠の身よ見れとぞ見へ
あまりすまれとも今やいかにかくもあら
咲を見て尽しかなしんで関寺の
の庭の面にもまとはりきれものを身

耳益もなし逢坂の山風の是生
滅法の理をもえばこそ飛花落葉の
折々は好ける道とて草の庵に
さかしつゝ筆を染てもしほ集
くや衣のことをれくは表紙も
歌をも詠ぬる婦の許うれしい
ちぎむは身も老のみのゆく末そ
出てよ ワキ いつまでも老身なれまじ之
れ入ぬ シテ 〽恥やさしくもわれは
ワキ 〽嬉しくもまた知らせ七夕の織女に
竹の葉の露まづいく年経ても吟
うたの小野の小町のよみおきし
星合の雲の上人よ引くし袖も今
麻衣は懐ましや痛つやかもわく
られぬ身の程とても今宵七夕の
手向の数も多しの式お東寺もそ
迎へとも童乃遊びも遊ぶとも言葉の種
そ面白さ 〽星祭るかり 其行乃
年待ちて逢ふとならばそれと七夕の ねう
数そとくからきる 〽わらゝ面白乃
言葉の種やかゞ結ぶ文節の露も
又逢し久方の乏しき七夕祭られても七
夜しやくや乃恋元百年へ年百年也
年まつらぬ錦の葉も気あく

ざれ花の枝　さしも継ぎも[illegible]
れ　衰へも見えつゝ　昔ながら
袖の　立まふ袂ひるがへせども
返る袖　[illegible]ども　[illegible]しの
古や[illegible]　[illegible]の[illegible]
夜や明けぬらん　関寺の鐘
も[illegible]　[illegible]るかね乃[illegible]
[illegible]も[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible]わし帰りて
帰るとて杖にすがりてよろよろと
もとの[illegible]屋に入りにけり百とせの
[illegible]と聞えし小町が果の名なり
けり

半蔀

うらも継ぎ[illegible]廬山の
[illegible]の中[illegible]に[illegible]月八く
[illegible]よわらり[illegible]の秋の風[illegible]と
この夕べ[illegible]と[illegible]風乃[illegible]
乃行方[illegible]手乃[illegible]
[illegible]や　山の端の心乃ん
[illegible]て入月かげの空に[illegible]
[illegible]の又[illegible]や　山[illegible]乃垣[illegible]
もわれ[illegible]わかれ[illegible]の
花の[illegible]見え[illegible]　[illegible]

すでに今はと思ひ乱の気

ちりとゞめぬるとも身は流給へかしよ

源もうつまにしも浮沈源氏の中将

宮とし代なかやの兵部卿ぞうらみ

のもとにあるをありとなしを流れ恋路

にけり我身をかくてもこゝろ浮舟

ぞ帰ゆくとこそ思ひけれ今もなれ

やかゝるうき身の恋ひしさまで

そのよすが(か)は被(か)なるるなりけり

れぬに源氏の宮をかへて思ひわびつ

る雅まさるもの身をかはれて

真しき源の浮まゝにてまよひ

しのび花をわけゆく舟もる源氏

の浮くも流れてしかのみうき

こゝよそふとゝもぞれなく見ゆるこ

とも其ゆえにてもなき見よ流れ

扇をもたる殿の猿の中まてき

われ舟もゆゑあなたよさきゆゑあまり

の乃花のおるしを誰とともかゝれ

しかも忘れ草も置し流しお

りまれりこゝ路 ありて絶

されどもとるこれなきめて

思ひし花のりて乱く花の露

風の思ひよりまさにせや川 たゝまへ

さそひ哉おもふ妻とゆかまし

なるの音聲も聞えけり苔深き

のあはれさ書もなりぬる響悲しき

みち又見乃やまりしのかたち

閨の今くさの戸寒く残るよ

夜月

三 我より夜風寒しけれ月おもひさ

めのあるそや空小野わたり

やまん鶯し哉聞なりて又

のまよ秋風乃野辺の松よ

三 月見るそや夜ふかくまちかわり

小夜の嵐は吹添て中々そよ

夜の更ゆくまゝに月をもうかめ

きけども猶乃野辺の雲風吹く

須磨の浦あきもやもとりかさ

旅の夢もなかなかわびしくも旅

枕とても夜半の寝覚もしのぶく

旅にくらべ世のさとの

あはれしとも哀猶君あへ

さもわび秋のうち乃木のわも

月をしれらよまし時雨寝覚

色聞え草木の夜の

まゝ我のうちもとふれそめ

てそ乃本まちも乃種の

あをもやことく月は山に蓋くや
ところ某乃さおとりのしかからう
ひらのはけりの昔乃となれあつめあ
のみとりとえん 其次をもかまえう
頭へも白やとこになへ雲あもと
ありあかいへしも法乃古跡あれ
も秘も宮義の勝浮乃香なる谷
いはしへ王雲しいもすしとともよへ
さやわくとれまん 答 わくみてさの
顕化やおけ法滅二乃たちまるを
自在をとりのて本作とともおらふ金
世あり上下をふれから玉乃ひへの己

女色顕化あへし 秋とは扨ゐか
常くし萬あくともおしなくとわ
亮らみのあきまゐり わ望
しいさとあしれ 神徳まさ沿
名されば大神の周位を称するに
高き和舞乃徳にみしてそる月は海
五弁と号し今にまもりの門へ出
まほとされ和歌をやりて位の御名
松林の中よりと出て名とかさるま若
らる家乃和哥乃金れなるまれ御方
法師かとさ運ひ施んとのみ
和哥乃友となく袖の袖更たれ作哉

はふり神主の袖をかへしや
笙琴の音よりうらうら篳篥の琴箜
篌の雛の舞の袖やかざしの花も
の岩井汲も松風も色ぐさの
花の気色も秋の錦の紅葉の
吹きおひの枝も同じく心問はれ大
御し風へひらりひらりと舞ふ
一叢の神楽の袖をかへして
とゆふしでの袖をかへせ袖かへせ
むかしの姿を今に見せんと
さやけしの月に鼓へうちな

鼓に

生まれて後の家の住吉の
ひとたび参らん輩はかならず御
二世の願ひを叶へん我が心の
沙風にさそはれて汲みて御
まして参詣の輩の身には
去程に参りて法の御
去る程に年久しく須臾に
滅して利益を受けるも
や釈迦大師の在世の頃より
なかなかや開きて法の道を
名利の身をたとへん菩提に
の姿をまねびて今かや

せとも[illegible]の[illegible]は[illegible]
まつるは光を[illegible]らく社
それ[illegible]はてつねくと[illegible]
世の中[illegible]月は[illegible]
も[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
おの時も[illegible]

三[illegible]をまよひて[illegible]をめくり
[illegible]て凡夫をのこし置し
ひとへに[illegible]をのむとそむきて[illegible]
[illegible]餓鬼のくるしみ
ひやく畜生修羅のかなしみも[illegible]
およひかたく[illegible]
とうされし[illegible]の苦をせめしか
かれは[illegible]くるしみ月の[illegible]
うれしきかな[illegible]の世の迷ひを[illegible]
[illegible]の世の月を仰ぎ照らし[illegible]
猶のかひもなくむなしく
おもはれしや[illegible]往

[illegible]をかむるもの[illegible]
く[illegible]
とく[illegible]かり[illegible]
[illegible]さかりにしよく
[illegible]これ迷悟の[illegible]
さめてとふく[illegible]天よりけひ
見よ[illegible]の[illegible]
[illegible]時も[illegible]
月夜[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]しと[illegible]の
[illegible]

かゝる[illegible]あつかんかんとて[illegible]の
程とかりかしると見えつる袖を
月の世のひかりとくだりしてとひ
[illegible]神は湖水に[illegible]
[illegible]の浦へも名もしら
天の[illegible]をひくせのくまく
そ入りける

六浦

〽見ぬ方[illegible]の春[illegible]わかき[illegible]
杉の元乃関[illegible]の[illegible]
春はかりぬる〽又[illegible]
うち[illegible]とのすみのむすれ

来まじくもなし　月日てかれ
[illegible]の秋なかりし[illegible]の
面白やつく[illegible]の花乃[illegible]
[illegible]と見えつる[illegible]秋と
[illegible]しよみねまし[illegible]
[illegible]さのかりと見え[illegible]
[illegible]の下葉の[illegible]
[illegible]とも[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
とかく[illegible]の[illegible]
[illegible]とも[illegible]
[illegible]の[illegible]法とさらけ

つ[illegible]を見し[illegible]の月
の夜遊をなし〽くもゐの袖とや
くさまし〽秋の夜の[illegible]をまつよ
ゆきさかもことたえてなや
かへすよ〽八乙女の袖をかへすよ
〽八乙女の袖もかへすよ〽[illegible]
さゝめきのそられ[illegible]
ひつゝ風流をせ[illegible]
満ちみちくる月まて[illegible]
[illegible]の原乃[illegible]
しばらくも[illegible]
[illegible]月の[illegible]

とぞなりにける

[illegible]

ワキ〽[illegible]天と云[illegible]流
布の[illegible]
[illegible]天の[illegible]山と[illegible]
ひさかたの[illegible]
[illegible]
[illegible]山 今[illegible]
[illegible]
[illegible]
も[illegible]月の山を[illegible]
[illegible]

けさ月のかけと照へとも乃れ非如
もわたす川越まし抜ひわさ
無明乃非法に迷ひを照さんと
ろや我の衆生乃善あ乃をあひ
衣顔海深隠細獄の衣を衆条
聲の数衣を無しつ端し法法
とと乃あひし来迎薫もこそれ
や善月を我よおの中ともに衆の掌奈
らとや手をめ當社の御相乃
山まで三公宝よ教をとや善因そかさ
よ我まく抜ひと思ふれ善因山實
我もまの変とりあ先おの今月
まとそ起そまるも七人る法の窓
も八金深の鈴とく善因の巻を
そのまう〳〵まれ
頼うれ派に
とあれ後に八尾浚大の事あ位
と勇りとこし拂しれ身ハ衣
我も不実よおわりめさえ今宵
一乗を説かは三乗の山よりも高き
つ摩耶夫人の胎生　伽耶の成道
鷲峯の説法　双林乃入滅を
ことく今に残し　出家の緒
あとず本源の時非の後我み時
風秀行そとく沁乃とあうれ光

国楽土　楽音能生楽土　微妙

阿修羅王　羅睺阿修羅王の極楽

の眷属ハ遠く光もなかしく

座列せり　然らは又波深の

徒く色妙なる和国乃流れは

阿修羅王の此海の底に住う

つ須弥や沖の中月の流れ

仏保の門つれつれひ出て大

然王御八大龍王八八の冠をうふ

け不老白銀の月乃三蓋れ雲

れのやりのびよりて起文の故る

もゆくみ山や摩那の延生独尊

の従法双林乃入滅重く泳うく

まさしく時は仏法衰微となりて
隨下界乃我邦乃出現やさしく人民
一国は乱劫せし時は仏法衰微
まるべし下界我邦の衆生を守り
八大龍王よ　難陀龍王　跋難陀
龍王　娑伽羅龍王や　和修吉龍
王　徳叉迦龍王　阿那婆達多龍
王百千の眷屬引つれて平地よ浪
深とまもく仏の法座よ参りてぞ
法を聴聞するや又妙法緊那
羅王　大法緊那羅王　持法緊那羅王　樂乾
闥婆王　樂音乾闥婆王　美乾
阿修羅王　婆稚阿修羅王の[illegible]
の眷屬引連く是もおなじく
座列せり　我等も亦深の
徳く仏妙なる教や和国乃原れ波
浪花の引よ縁の光ぞ忘らう
つる浪や沖ゆく月の光
仏像の尊くつきひ普通と八大
我等乃御　八大龍王八八の冠よりふ
け　天表日夜に月乃三光雲
れのやりびよりて龍火の於る
も高く御を　摩那の延生指事
の従法双林乃入滅垂ぬうく

さまであらじや明恵上人入唐
ワキ とゞまるべし　渡天もいかにや
ワキ 尋ぬるまじ　御仏跡を尋ぬまじ
しや鳴るとひとしく黒雲
に乗じて龍女は南方に飛去り
龍神は猿沢の池の青波
けたて〳〵て其たけちひろの
大蛇となりて天にむらがり地に
蟠つて池水をかへしてうせ
にけり

檜垣

シテ 夫氷は水より出て水よりも寒く
青は藍より出て藍よりも深し
古の浮身の業は今の苦しみ去
りもやらで　いや増りの思ひの露の
井は深く身をこかとくりかけ縄
くりかへし浮古へも花の袂の
あまりに慕ふ秋の夕暮を一日は暮らしても
やがて好む舞女の誉れ世に勝れ
せめてさらぬ紅顔の粧
いつかは花の桂の眉も霜を
てふりはつる面影の衰へ流れて
みどりの髪は〳〵

唐茶やらげうさのゝ振を出しき

実やふる事を思ひ出れはなつかしき

すみ田川の浪かけし　薄衣の舞

花の、もと古への白拍子今一ふしとて

しかハ昔は花の袖今もやさしき衣

らかの袖を返しされぬ色そほき懐

奥州けふの細布も結わけ何とも

拍子甚句気のつきようくそれ

とても昔の別し舞霊に八すもそも

今かくをかまうと　風花やきうらん

の身へ八歳ましなうら麻の袖を打

たらひ舞おと　猩々の女の身塁と

水しらぶ白縄の俤のぼる竹縄のぐり

出し昔にかへす田川の浪まくら

の波田川の　わかれは我子ゆへに悲

生別れわかるなるそことわりもの表

きりゆまうきらき無れわハそこへ来

らとう寵をうくでそのほく

本調

いんや一世は親子の中てかとも

あつきうんていふおもひを

あつ母ぞんこんみ屋舞かくな

我父をうやまう次なて　継を父

かの無聊孝思れ念あらん年娘の涙

連てたり縁の昔を今思も羅

こゝをもさ流ゆへりいんや二世の中

ど浮丹代硯の中半よりと咲きにて

けがされ公義経出て泊り二芳野の

秋の嶺は代議わくは数も関東なき

さま義経都人代松をとほし沼陽の縁南

篭る国となる下。さわく嵐山の松

流恵く来路しききかかりて代法の神

恵とをかつ紀がつ下しわるかし三悪

なしき五拝りし

実 但容流

百四十三

へハ実をもたぬ肴なれど続くこれハ
さまで実 親なりけり 子なりける
とや恨しや〳〵さハいとゞ思
給ひぬるもよくおハす時こそ恨あり。
こハ心めうなる夢にてもあるか狂言かり
けれ かくて親子ハわかれゆく。
世を古里と後にし佛法流布の寺ふか
し 化縁の縁となりにけり孫小さきやの
契りうき世語りに残りけり〳〵

吉野都

詞 抑是ハ彼判官ハ神仏にも見はなされ軍勢
をうやまひともにふかき鮑を抽へて。
私の肯と更に申し人さしとも
神仏に誓ひかけて不孝の許されん
雖ら拝の扶に將くうつれり其
義経を守りまへと行きて夜あけの
曲 抑京時りを経きのさなくと西へを
渡島や流れて北にみちて横川
と淀舟に便京て半よりと呼にて
ゆりされハ義経ハ近ふ治め三吉野の。
秋の櫻ハ織わたは紅葉も関白などを
さま義経形ハ此釉ともに法然傷の
絶ら国となるべし。されば當山の花
院悪く来語し。ぎあかりで此法神
恵みとぞなりけり わかれし 忝
其給ふ法拝ハ深し 但宜流

中に梶原源太にて。とゞみく追のを
経高も名字ゆゝしく、とはとくめア
さんハ片岡増尾鷲の尾張忠信は兼
なれ様云をよんでは弥兵衛れ武家
と伊勢ハ宗人ながら中にはよらむ人を
なりさまを眺やむ河々静や継賤
誰々ぞり送し　昔を今になさとよ
しもかく大勢の面白さに晴
刻をうつてとゞまらぬもあり又は
判官武勇に先もよし弟継信が
やせし。金銀をそりて衣もをりき
継よ時うつりて黒も今を思ふか。
喋きそろうとも姉が兄に節
やむ去河より我紀て、袂に袖ぬられ

烏頭

打出
とても渡世をいとなまば士農工商の
家にも生まれず又は琴棋書画を
嗜む身ともならずして唯明けても
暮れても殺生をいとなみ　遅々と暮る春
日も所作たゝ稼ハ財とうしなひ秋の
夜長し夜なれども漁火白うし
て眠る事なし　九夏の天も暑さを
忘れ　玄冬のあしたも寒からず
鹿追ふ猟師ハ山を見ぬにゆきすわりの多く
かなしさも忘草のをひしげる
縄をさし引く汐の末の松山風荒れて。

神には[illegible]の梵文八字深くて盛に
しめし置きたまふの極重力をこう
に離れぬまでも喜びをつきをかし
物しさよ抑うるを屋を打ちおとく
にふかうりとる殺生の[illegible]作に[illegible]
したる五重蔵かや読破地獄よこの猪
にまんをしきはのときをともかけよ
か弟油に子を産む落ちものが
や親ハくにとどれとうとうもさきて。
子ハ母をかさと養ハれ極そとてれ世を
かさうとふ親ハ命にて血の涙を
くふ世ハぬまてとる養ハ候を
かさおはうりこの便をとりとめてかく

まことがれ養ひをわすれ我身が
うう血の涙のむとれをおくらんお命
の杯のかざつききう世の中にて今うき
面影とさとるやーをく冥途にてハ
紀行となる羅ハもまやて孫の
美のしぼをさ死綱のれ世そ
眼をさらんて時をさけんとされ
猛火の煙にむせて妻をわけさねき
登る峯をうるむ痛やらんおさんときれ
手をそは羅極苦の報ひ鳥おはが
雨で寒き鳥なりぬ我は雉子をぬさ
アヽ其ノ我まかさの猪場のふきこれ
冬を更をさ一地をよう地大焦熱責

られ[illegible]とかくれ[illegible]
か[illegible]風[illegible]へや泣[illegible]
とけてたゞやたゞ[illegible]出家[illegible]

女郎花

サシ 扨ハ我妻の女郎花とハなりけることよと。猶花色もなつかしく草の袂もむつまじく[illegible]立よれば此花恨たるさま[illegible]にて夫のよれば靡きのき[illegible]又立のけハもとのごとし。此故に貫之も男山の昔をおもつて女郎花の一時をくねると書し水茎の跡の世までもなつかしや。頼風其時に彼[illegible]うき世ハ我故によしなき水の泡と消て徒なる身と成も偏に我故[illegible]うき浮世の後[illegible]とこそ同じ道になるんとて続て此川に身をなげて失[illegible]女塚に對して又男塚と申なり其塚ハ是主の[illegible]跡弔ひあく

荒閻浮恋し邪婬の悪鬼ハ身をせめて其念力の[illegible]しき劔の山のうへに恋しき人ハ見えたり。嬉しやとて行のぼれば劔ハ身を通し盤石ハ骨をくだく。こハそもいかに恐ろしや。劔の枝のたわむまでいかなる罪の。なる果ぞやよしなかりける花の上

時しもゆくとをなそ女にも花ぞ袖のうてかや花の袂にぞ浮くへ返る会御遊うかへしまもひあへ

白楽天

花に鳴鶯水にすむ蛙までもろこしもと日本には歌をよみ給ふあましされ寺をはかくのごとく候なり孝謙天皇の御宇かとよ大和の国高城やまてらの寺に梅の枝にきゐる鶯の声をきけば初陽毎朝来不遭還本栖となく文字に写して見ればこれは三十一文字の和歌の詞なりけり　初春のあしたごとには来れども

同　またおりてそかつらきの栖ふまつ鶯の聲を嫁として我もなら義をぞんたへて歌をよむなりけりあくそ海の濱の真砂の数生きとしいけるものいづれか歌をよまざらん

実や和国の風俗のくさ〴〵の後の実も雑きわらひや　迷も和国のこそ遊び和哥と舞楽の曲をはじめ聞え　それや舞楽の遊びに舞ふは誰やらん　誰なるぞそもや現せよ我ふあく八代舞楽の　波々の底に　住吉とる舞人八代尉の老の波の上代あつて海青楽かへ入海をまい

嬉しや此原のおもうこかしぷ

ますみの鏡のうつる水も淡海の

浪の花ちりぬる事も白浪の海かさきうて

の波音より鶯の声まし住吉の神

住吉の神住吉の玉きかし住吉の

此神の力のおゝん住吉の回となさ

かへさせ給ふしあさとの海くに浦の浪越

伊勢に天照住吉現し来たく。

伊勢石清水かも春日平野稲荷

熊野安芸の厳島の明神娑竭羅龍

王の第三の姫宮にて海上にうかんで海

まて来て舞給へ八大龍王かんちうの

曲をそろへし四海にあけりつ舞給ふ

嵐凡千風神風に吹かれて御

船も当より遥かに海行く難や

神と君との道や神と君との代の

こゝぬ雲の末たく

継信

摂津国より紀そゑや入を平家を

不はまく皆松明をつけ

こゝに丸合ひ能登殿

をむくへきなんて手をとり

しおそろく親ちかく中を刀をぬいて

海に合こゝに入こゝへ教経

はまてたき首へ入を重ね

と十三人同じ枕に切ふせて外

手負太刀を捨国昼とうへなれなかく逃
て命斗を遁るもあり熊坂ハ安からず思
者共ハ是非に於ハいか程の[illegible]人間ぞ
てなりともわらし盃も命のあらん程ねかし
よもやひかんとて長刀杖につきてうしろ
禅らくさと引ゝて熊坂思ひやうく
物ゝし其冠者が切ていなさそ首途
熊坂秘術を振ふといへともいかなる天魔鬼
神なり共中に抓しらちん事なかるべき
者共のぞ老長範部せんとてびやう
とつて返し例の長刀ひつさげてあやうく
定をとつてそれに取て彼小男を待ひかう
牛若子ハ法境して太刀振もあれ合ハ
少備て待の熊坂も長刀かまへ寄見
かゝると待かけて熊坂さんくに[illegible]
て西東も通れと請く長刀おつとりを
おてうぞ止へ飛八追乗するまこむ
長刀おひくつとは生ふむてきれ刻さ
かゝりてへいと返す事で下とき
生体にて落まもよく見透て擲
八飛わろてに海ぬを飛まよ次
やかゝと秘ら所にて[illegible]もよぬけす。
思のの続手を丁とされてハ小波
額たにもも切とれ半の膝まさら立天
命の運のさかあ会なく熊おもさえ
ていやましくわれに思へとて長刀か

け捨大なるやのは雲はめぐるかしこの
傳りと遁れ遁とらんとすれば峰々嶮
まぼろし水の月やむすばれ見えしとも

船弁慶後

神明佛陀の冥感に背き天命に沈みし
平家の一類　主上を始奉り　一門の月卿
雲霞のごとく波に浮みて見えたるぞ

（後シテ早笛出ニテ）抑是は桓武天皇九代の後胤平の知盛
幽霊也（詞）あら珍しやいかに義経　思ひもよらぬ
浦波の　聲をしるべに出舟の
（上）知盛が沈みし其有様に　又義経をも
に沈めんと　夕波に浮める長刀
とり波の紋あたりを拂ひ潮をけたて
悪風を吹かけまなこもくらみ心も乱れて前
後を忘ずる計也　其時義経少もさはがず
打物抜もちうつゝに向ふがごとく
詞をかはし戦ひ給へば　弁慶おしへだて
打物わざにて叶ふまじと数珠さら
〱と押もんで東方降三世南方軍荼利
夜叉西方大威徳北方金剛夜叉明王
中央大聖不動明王のさくにかけて祈りいの
られ悪霊次第に遠ざかれば弁慶舟子に
力を合せ御舟を漕のけ汀によすれば猶
怨霊は慕ひ来るを追はらひ祈のけ又
引汐にゆられ流れ又引汐にゆられ流
れて跡白波とぞなりにける

賀茂

山河草木動揺して　ばのわうゐなす
わき雷乃神体来現し給へり
抑是ハ王城を守る紀君は岩別雷の神
也識を法天台神となつて虚空に翔
翔り　又八國土を守護の方便　鶴
同塵結縁の衆荒る雛の御事也
風雨隨時のみ空の雲井　くく　別雷
の雲霧を穿ち　光稲妻の
稲葉の露にも宿る程なる雷の
おこして降りくる足おとハ　ほろほろ
ほろほろとどろとどろと踏とどろかし
なる神の鼓の時もいたれハ五穀
を國土を守護し給ふ時は此神は
威光を顕し　あまし陰せは　みやの神
糺の森に飛去くいらせ給へハ程
そらや雲居に別雷の神も天路
まちのあに神も天路をさしての虚空
て虚空にわかりせあひける

金札

かくれひれてこそ其森の袖に
そばくふれ　せうへし疑なれ
皇の御代は治まりて海しかきらう
しなく業物代の風
但おりく也の神と君と奉りく
くまゐを金札伝れの錦光ましまず

寺は八宗法を治め 仏法ひさしく
あまさかんなる御代や 八百萬代の宮居
なきまや 悪魔降伏の表示の尊像
愛染は八葉の光明 弓と矢とを持つ様の
ひとつは 弓矢と龍 すなはち秘文もたせたまふ
神力は悪魔を鎮めて 浄めとなれとや
今胎金両部のかたち也 とても治まる
業は八くばくなれや 君は舟臣
水穂の國もおさまる世なれや 宗
東西南北 戎狄のおそれなきを
弛弓剣とおさめ 矢も直ぐなる弓の
はれは又治まりまいらせ はげさし
ゆろは玉座がけきし ゆうなにまさる御代の

此八拾番之囃謡大字者
以下掛拾遺大成之章句
加秘密之拍子附令板行
者也

享保十二丁未歳　新校正
宝暦三癸酉　改板

京城書林　谷口七左衛門
新町通下長者町上ル丁

書肆　谷口梅花堂蔵板　目録
下掛拾遺大成謡（中本内外／大本内外）　二百番
衣裳附ハルトリ拍子附入
同堂蔵謡内外二百番　出来（御望次第）
同外三百番目謡百番　未刻

謡内八拾番（三番笛唱哥數星附入）　全一冊

外囃謡大成（弓矢立會小鼓一挺鼓三ッ鼓物入）　全一冊

同亂曲大成　全二冊

同酒宴小謡（謡問對入）　百番

能之訓蒙圖彙（舞臺之圖能道具之圖）　全四冊

能之圖式大成（能由来衣裳附）（面小道具図作り物図謡名寄入）　全六冊

和歌極秘傳抄（哥之口傳亨）　全一冊

同續極秘傳抄　全一冊

陳氏病源方論（内二冊痘疹方論）　全四冊

法華座敷談議　日審作　全三冊

下掛囃謡拾遺大成（并大小鼓頭附笛唱哥呂傳入）　全二冊

京新町下長者町上ル丁

谷口七左衛門板

大短 98976 受入 36. 3. 14